令和３・４年度　岩国市小中一貫教育に係る確かな学力推進研究事業

麻里布小中学校公開授業研究会

【研究主題】

すべての子どもが「わかる」「できる」喜びを実感できる小中一貫教育の推進

令和4年11月7日（月）

会場　岩国市立麻里布小学校

主催　岩国市教育委員会

＜目次＞

１　はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２

２　麻里布小中学校の紹介　・・・・・・・・・・・・３

３　小中一貫教育の概要

（１）　小中共通研修主題及び仮説の設定　・・・４

（２）　研究推進組織　・・・・・・・・・・・・・・７

（３）　小中一貫教育推進に向けた取組　・・・・７

（４）　各部会の取組

①　ふるさと学習部　・・・・・・・・・・・・・９

②　学力向上部　・・・・・・・・・・・・・・・・12

③　心と体の教育部　・・・・・・・・・・・・・16

４　公開授業指導案　・・・・・・・・・・・・・・・・21

５　おわりに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52

１　はじめに

人口減少や Society5.0 時代の到来、グローバル化の進展、新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大による新たな生活様式への対応など、教育を取り巻く環境が急激に変化しています。

山口県においても、教育における DX（ﾃﾞｼﾞﾀﾙﾄﾗﾝｽﾌｫｰﾒｰｼｮﾝ）が推進され、大きな転換期を迎えています。これまでの学校現場における教育実践の蓄積と ICT 環境を最適に組み合わせる中で、子どもたち一人一人に応じた指導方法や指導体制の工夫による「個別最適な学び」、探究的な学習、体験活動を通じた多様な他者と関わる「協働的な学び」を一体的に充実させ、子どもの可能性をひろげる「やまぐちスマートスクール構想」の推進が求められているところです。

麻里布小中学校でも、児童・生徒用に１人１台のタブレット端末が順次導入され、本格的に GIGA スクール構想の実現に向けて動き始めました。昨年度からは、岩国市教育委員会から小中一貫教育にかかる確かな学力推進研究事業の指定を受け、「すべての子どもが『わかる』『できる』授業をめざした学習・指導方法の改善の推進」を共通テーマとして、中学校は「個別最適な学び」、小学校は「ユニバーサルデザイン（UD）」をキーワードとした授業改善に取り組んできました。2 年次である本年度は、これまで研究を進めてきた 4 部会から、ふるさと学習部、学力向上部、心と体の教育部の 3 部会に改編し、学校・地域連携カリキュラムの検証・改善に努め、さらなる小中一貫教育の推進に取り組んできました。そして、研究をさらに進めるべく、「すべての子どもが『わかる』『できる』喜びを実感できる小中一貫教育の推進」を主題に掲げ、授業実践や研究を重ねてまいりました。本日の公開授業研究会では、その一端をお示しできたらと思います。

終わりに、本研究に対しまして御支援、御指導をいただきました岩国市教育委員会をはじめ関係各位に心からお礼申し上げます。

岩国市立麻里布中学校
校長　大　谷　弘　喜

２　麻里布小中学校の紹介

麻里布小中学校は、岩国駅、駅前商店街や岩国市役所を含む岩国市の中心部を校区とする活気あふれる地域に立地する学校である。元々、麻里布小学校と麻里布中学校は、同じ地域を校区とする学校であったが、令和２年４月、岩国市の小中一貫教育のスタートに伴い、施設分離型の小中一貫教育学校「麻里布小中学校」として再出発をした。

麻里布小学校は、明治６年（１８７３年）１月に今津小学校として開校し、明治４４年（１９１１年）に麻里布尋常高等小学校となった。令和４年度は、記念すべき開校１５０周年を迎えることとなる。

学校教育目標「主体的に学び未来を切り拓く、たくましい『麻里布っ子』の育成」の達成をめざして、今年度は、「安心・安全」（にこにこ）、「交流」（わくわく）、「探求」（どんどん）を重点目標とし、子どもと学校、家庭、地域が目標に向かって響き合い、心を一つにして前進する学校をめざしている。

麻里布中学校は、昭和 31 年４月に、東中学校から分離する形で設置された。学校創設直後は、麻里布小学校の校舎を間借りする形で出発することとなった。まさに創設当時から小中一貫教育の流れがあったといえる。

また、公立の中学校としては珍しく学園信条が制定されている。麻里布中学校学園信条「一、私たちは仲間である　一、私たちのいる世界は自由でありたい　一、私たちは自分をみつめる」である。さらに、学校教育目標も、「学園信条の精神を生かし、豊かな心とたくましい実践力をもった生徒の育成」となっており、自由でありながらも、自治的な校風を伝統としている。教職員も、生徒の主体性を伸ばす教育を信条として、常に生徒を主役とした教育活動を展開している。

加えて、麻里布小中学校では、「ふるさとを愛し、自ら学ぶ、たくましい児童生徒の育成」を小中一貫教育目標として掲げ、各校の特色ある取組を系統的に配列、整理した学校・地域連携カリキュラムを作成し、麻里布地域で一体となった取組を推進している。

このように、麻里布小学校で育まれた力を基盤として、麻里布中学校でさらに磨きをかけ、家庭、地域とさらに連携を深めながら、これからの社会を支える「志高く豊かな心と生き抜く力」を育成していきたいと考えている。

３　小中一貫教育の概要

（１）小中共通研修主題及び仮説の設定

【すべての子どもが「わかる」「できる」喜びを実感できる小中一貫教育の推進】

〈主題設定の理由〉

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う様々な事態に象徴されるように、いっそう不確かで予測困難な時代になっている。そのような時代を生き抜くためには、身のまわりの出来事に目を向け、課題を見出し、主体的・対話的に考えながら、最適な答えを生み出せるような、協働的な学びが求められている。そして、このような変化の激しい社会でも前向きに受け止め、多様な人とつながりながら新しい価値を生み出せる、創造力豊かな子どもたちを育てていかなければならない。

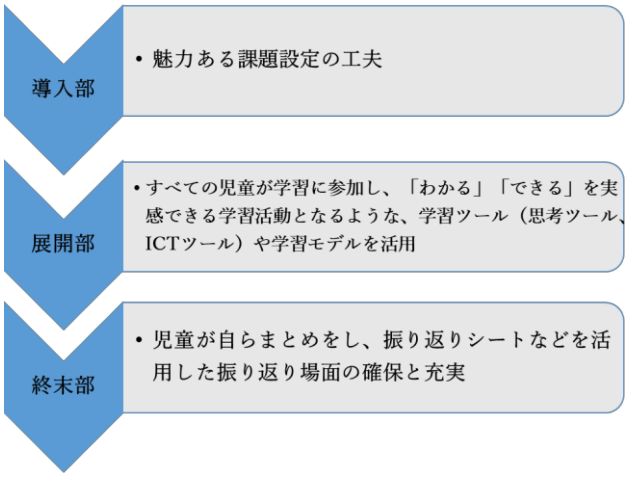
新学習指導要領においては、情報活用能力が、言語能力、問題発見・解決能力等と同様に「学習の基礎となる資質・能力」と位置づけられ、「各学校において、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整え、これらを適切に活用した学習活動の充実を図る」【総則より】ことが明記されるとともに、小学校においては、プログラミング教育が必修化された。今後の学習活動において、積極的に ICT の活用を進めていく必要がある。

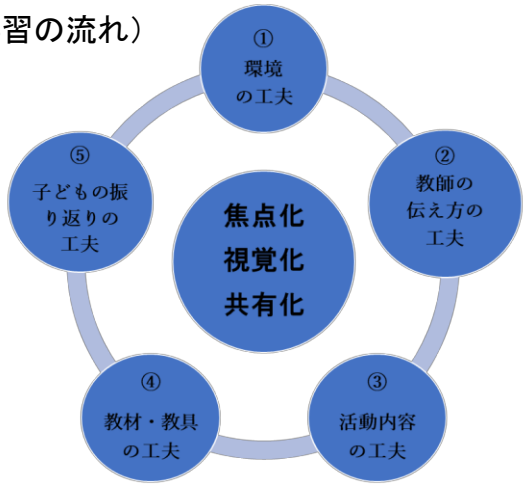
また、麻里布中学校区の子どもたちは、与えられた課題には意欲的に取り組むことができるが、自ら目標を定めその課題に取り組む主体性や、学びを振り返り学んだことを次につなげる自己調整力に課題があり、その個人差が大きいという現状がある。

こうした課題をふまえ、小学校では「授業のユニバーサルデザイン化」(以下 UD 化)、中学校では「個別最適な学び」をキーワードとし、授業のユニバーサルデザインを視点にした授業改善及び、一人一人の理解状況や能力・適性に応じた個別最適化された学びを行うことですべての子どもの意欲を喚起し、「わかる・できる」

喜びを実感できる授業づくりをめざした学習・指導方法の改善に取り組んでいくこととした。

◎学習のＵＤ化をめざした授業構成
（意欲と思考の流れを途切れさせない学習の流れ）





さらに、UD 化をめざした授業構成と個別最適化された学びに向かうために、ICT を効果的に使用することが有効であると考えた。ICT 活用のレベルを高めていくためには、子どもたちが自ら課題を見つけて、ICT を活用し、伝えたいことを表現する授業に変えていく必要がある。そのためには何が必要かを教師自身が考え、自分の授業を変えていくマインドチェンジが必要である。機器やソフトの導入に終わらず、子どもの成長に寄与するという成果に結びつく ICT 活用を進めていくために、整備段階から教員研修の重要性にも着目し、取組を進めてきた。

しかし、自ら学ぶためにはそれを支える「学びの基礎」（たくましい心と体）や子どもたちの成長のよりどころとなる地域（ふるさと）とのつながりが不可欠である。

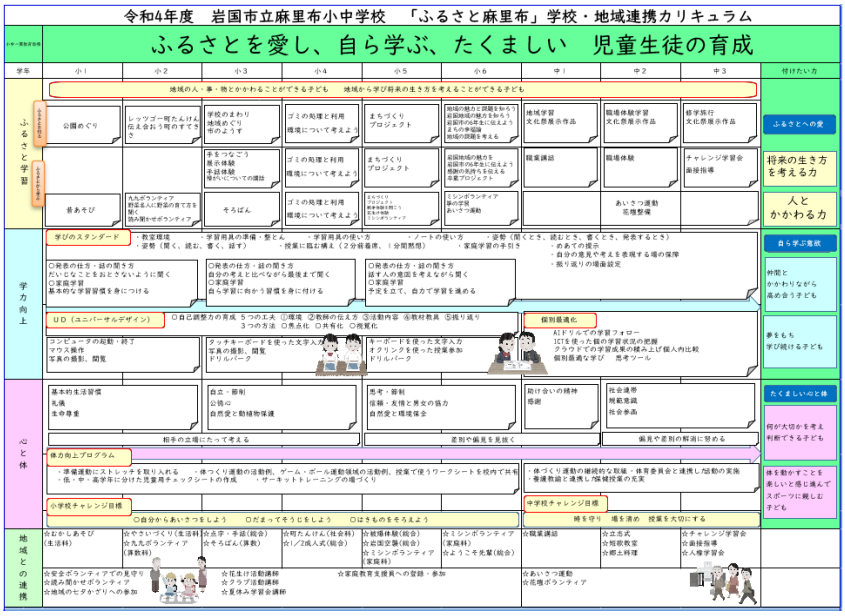
以上のことから、麻里布中学校区小中一貫教育目標である「ふるさとを愛し、自ら学ぶ、たくましい児童生徒の育成」をめざし、麻里布小中学校教職員、保護者、地域の方々との協働を通して、「ふるさと麻里布」学校・地域連携カリキュラムをもとに小中一貫教育の研究を進めていくこととした。

〈研究仮説〉

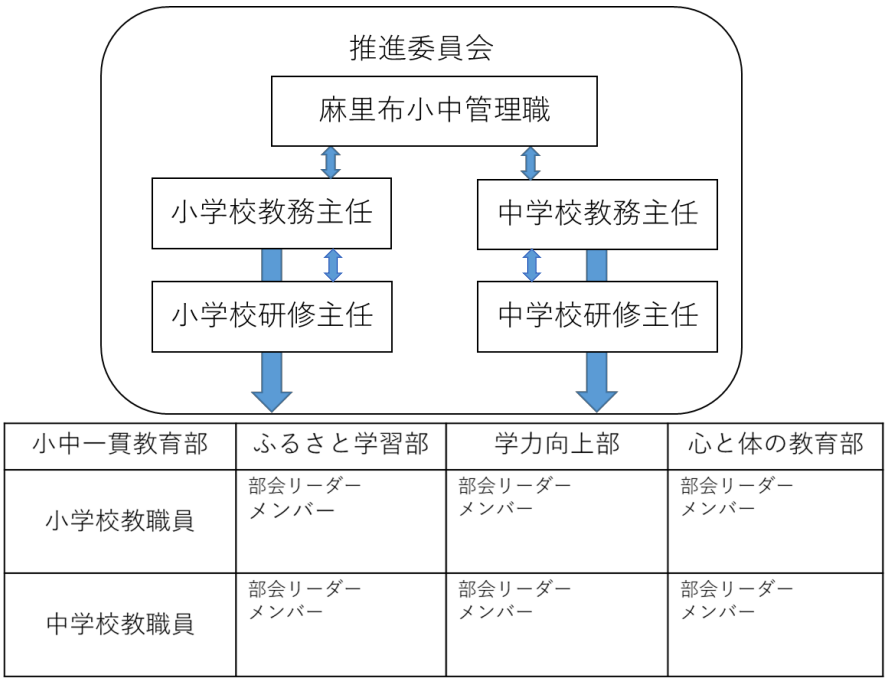
○　学びの場において、UD 化を意識しながら ICT 機器を活用することで、一斉指導による学びに加え、児童生徒一人一人の能力や特性に応じた学びや、児童生徒同士が教え合い学び合う協働的な学びを推進することができ、基礎的・基本的な知識・技能の習得や、思考力・判断力・表現力等や主体的に学習に取り組む態度の育成につながるであろう。

○　麻里布小中学校教職員、保護者、地域の方々との協働を通して、共通の課題をもち、「ふるさと麻里布」学校・地域連携カリキュラムをもとに研究を進めていくことで、ふるさとを愛し、自ら学ぶ、たくましい児童生徒の育成につながるであろう。

これからの高度情報通信社会をたくましく生き抜くための情報活用能力の育成を目指し、ICT 機器を積極的に利用することで、児童生徒の学力向上につながることを期待したい。そして、保護者や地域で学校を支援する仕組みづくりを促進し、児童生徒の学びを支援するだけでなく、活動を通じて、保護者や地域とのつながり・絆を強化し、地域の教育力の向上を図りたい。



（２）研究推進組織



（３）小中一貫教育推進に向けた取組

小中一貫教育では、小中学校の教員が連携して、教育の内容や活動の内容の系統性を踏まえ、義務教育 9 年間で児童生徒を育てるという認識をもちながら取り組むことが重要である。すなわち、小中学校教職員が一体となって教育活動に取り組んでいく必要がある。

① 研究組織の再編と小中連携の強化

昨年度から、小学校では授業の UD 化、中学校では「個別最適な学び」「協働的な学び」をキーワードとし、「学習プロセス」「学習チーム・ルール」「学習ツール」「学習モデル」の 4 つの部に分かれて、ICT を活用した授業改善を中心に取り組んできた。1 学期には小学校 6 年国語科「海のいのち」、2 学期には小学校 4 年社会科「郷土の伝統・文化の先人たち」、3 学期には中学校 1 年国語科「少年の日の思い出」を小中学校全教職員で参観・協議を行い、すべての子どもが「わかる」

「できる」授業づくりに取り組んだ。また、年間を通じて一人一授業を公開し、授業改善に取り組んできた。

今年度は、さらにめざす子どもの姿を意識し、「学びの土台」となるたくましい心と体を育てていく必要があると考え、児童生徒が自己肯定感、自己有用感を実感できるよう日々の学級活動や縦割り班活動などの特別活動、ICT 機器の活用や情報モラル教育、体力向上プログラムなどに取り組んだ。さらに、子どもたちの成長の拠り所となる「ふるさと」へ目を向けることが「ふるさとを愛する児童・生徒の育成」につながると考えた。

そこで、2 校で連携しながら、「ふるさと学習」「学力向上」「心と体の教育」3 つの部会に再編し、小中一貫教育の推進を進めてきた。

また、小中学校の教員が連携を図るため、合同研修会を 6 回、研究推進委員会を 8 回実施し、計画や実践の検証に取り組んだ。その他、合同授業の実施、夏休み学習会への中学生の参加、小中合同ふれあいコンサートの開催、小中教員同士の情報交換などこれまで以上に多くの関わりをもつことで、9 年間を通してともに育てる意識を高めた。

② 学校・地域連携カリキュラムの検証・改善

小中一貫教育を進めていくには、麻里布小中学校の連携だけでなく、学校と家庭、地域が連携し、「子どもと地域とともにある学校」にしていく必要がある。麻里布中学校区（ふるさと）が、子どもたちの成長の拠り所になるよう学校支援と地域貢献を充実させ、付けたい力を明確にした学校・地域連携カリキュラムの検証・改善を進めている。

（４）各部会の取組

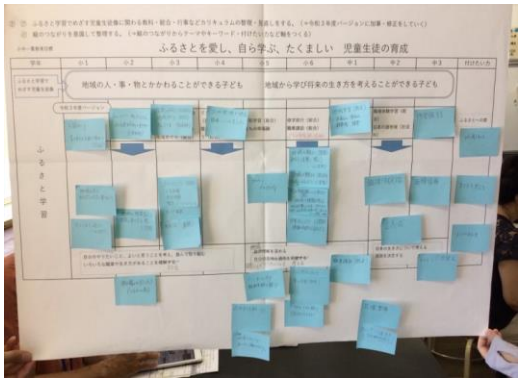
①ふるさと学習部

部会のテーマ

地域の人・事・物とのかかわりを学ぶことで、将来の生き方を考えることができる児童生徒の育成

ア　取組の概要

○「ふるさと麻里布」学校・地域連携カリキュラムの再検討



ふるさと学習部では最初に、これまで各学年で実施していた地域にかかわる学習を整理し、校種間や教科等の互いのつながりを俯瞰した。学校と地域が連携した様々な取組がすでに多く行われており、児童生徒が地域行事に参加する姿や地域の方が学校運営や学校支援に携わる姿が日常的なものになっていることを改めて知ることができた。そして、これらの資源を最大限生かし、児童生徒の発達段階に応じて持続可能で系統的なカリキュラムの作成をめざしている。

その１つとして、学校・地域連携カリキュラムの再検討を行った。麻里布小中一貫教育目標である「ふるさとを愛し、自ら学ぶ、たくましい児童生徒の育成」から、ふるさと学習部では、めざす児童生徒像を「地域の人・事・物とかかわることができる子ども」「地域から学び将来の生き方を考えることのできる子ども」とした。達成のために「ふるさとを知る」「ふるさとから学ぶ」という２つを軸として、今までの取組を系統的に整理していった。さらに、９年間のふるさと学習を通して、児童生徒に付けたい力を「ふるさとへの愛」・「将来の生き方を考える力」・「人とかかわる力」の３つに絞ることとした。

このように、今まで行われていた取組をその時々の点で捉えるのではなく、９年間を通して、最終的な目標に向けてのつながりを意識することで、教員が同じ方向性をもって効果的に取り組むことができると考えた。

○ ふるさと学習の充実

小学校 5 年生において総合的な学習の時間のカリキュラムの見直しを行い、「いわくにまちづくりプロジェクト」を１つのモデルプランとして 40 時間の単元計画を立て、今年度より実践している。

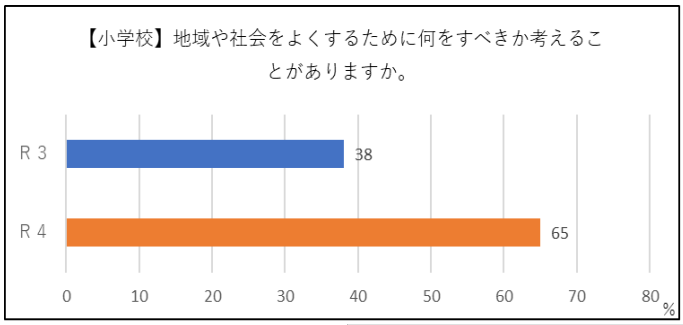
今回の「いわくにまちづくりプロジェクト」では、地域の活性化に携わる組織や人々とかかわりながら、麻里布地区の現在の課題を捉え、自分たちにできることを考えていく構成とした。地域の人の思いや願いを実際に聞き、ともに協議や実体験する機会を設けることで、地域の一員としての意識を高め、身に付けさせたい３つの力の育成を図っている。

５年生以外の学年においても、「生活科・総合的な学習の時間における単元プラン」（別掲資料①）を作成し、探究課題を明確にした上で、ふるさと学習に取り組んだ。

イ　成果と課題

○ 成果

・ふるさとへの所属感の高まり



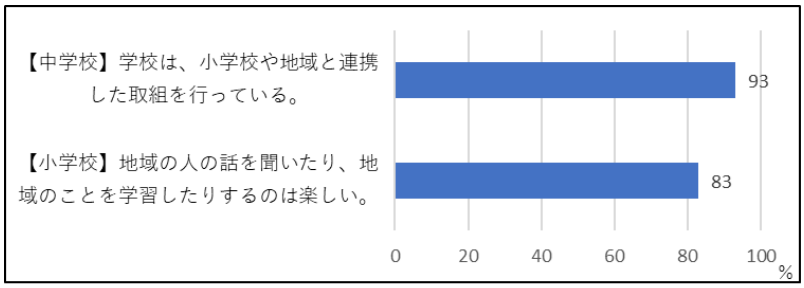
R４ 全国学力・学習状況調査児童質問紙より

自分たちの暮らしている身近な所から麻里布校区、岩国市と少しずつ範囲を広げ、地域の人とかかわりながら様々な体験や学習を行うこ

とができた。全国学力・学習状況調査児童質問紙における「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがありますか。」という設問に対して、肯定的に回答した児童の割合が、令和３年度は 38%だったのに対して、令和４年度は、65%に向上している。様々な活動を通して地域への所属感を高め、地域の一員として役に立ちたいという意欲を高めることができたと考える。

・児童生徒の自主性を伸ばす探究的な活動の充実

今年度の５年生は、テーマや課題を教師から提示して進めていくのではなく、総合的な学習の時間で求められている「自らが課題を見つけ、情報の収集や分析を行うこと」を取り入れ、考察したり、まとめたりする自主的な活動を進めることができた。同様の活動が、小中各学年においても展開され、児童生徒の自主性を伸ばす探究的な活動の充実を図ることができた。今年度の学校評価アンケートからも小中連携や地域連携教育に対して、児童生徒自身がよさを実感していることがうかがえる。



Ｒ４学校評価アンケート結果より

○ 課題

・学校・地域連携カリキュラムのさらなる検証・改善

今回、見直した学校･地域連携カリキュラムを基に地域連携教育を進めていく中で、９年間を見通した活動を展開することができたものの、教科横断的な学習や各学年間のつながりについては、さらに検証・改善を重ねていく必要があると考えている。また、児童生徒が自分自身の視野をより広げ、ふるさとを知るだけでなく、地域の一員としてどのような貢献をしていくことができるかなど、自分の生活や生き方に立ち返らせていくことを大切にしていきたい。

②学力向上部

部会のテーマ

すべての子どもが「わかる」「できる」授業をめざした、学習・指導方法の改善の推進

ア　取組の概要

○ すべての子どもが「わかる」「できる」ための授業づくり

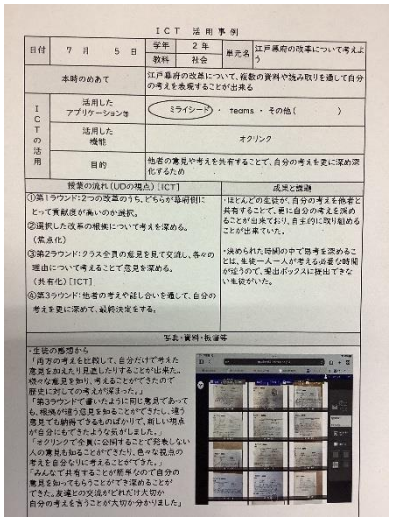
協議の様子

学力向上部における協議の中で、すべての子どもが「わかる」「できる」ためには、授業の UD 化、および効果的な ICT 機器の活用が重要であると一致した。そこで、学習・指導方法の改善について、校種や専門教科を超えて全教職員が同じ目標をもって進めていくために、学習指導案の中に「ICT 機器活用」と「振り返り」の手立てを明記することにした。

さらに、学習の焦点化（授業のねらいや活動を絞り込むこと）、視覚化（情報伝達をスムーズにすること）、共有化（協働的な学びにより理解を進めたり深めたりすること）という UD 化の視点で授業構成を整理することで、すべての子どもが「わかる」「できる」授業づくりにつながることを確認した。

○ ICT 機器の効果的な活用

すべての子どもが学習に参加し、「わかる」「できる」を実感できる学習活動になるように ICT 機器を効果的


ＩＣＴ　活用事例

日付	７月　５日	学年	２年	単元名	江戸幕府の改革について考えよう
		教科	社会		
本時のめあて		江戸幕府の改革について、複数の資料や読み取りを通して自分の考えを表現することが出来る			
ＩＣＴの活用	活用したアプリケーション等	ミライシード・teams・その他（　　）			
	活用した機能	オクリンク			
	目的	他者の意見や考えを共有することで、自分の考えを更に深め深化するため			
授業の流れ（UDの視点）［ICT］		成果と課題			
①第１ラウンド：２つの改革のうち、どちらが幕府側にとって貢献度が高いのか選択。 ②選択した改革の根拠について考えを深める。（焦点化） ③第２ラウンド：クラス全員の意見を見て交流し、各々の理由について考えることで意見を深める。（共有化）［ICT］ ④第３ラウンド：他者の考えや話し合いを通して、自分の考えを更に深めて、最終決定をする。		・ほとんどの生徒が、自分の考えを他者と共有することで、更に自分の考えを深めることが出来ており、自主的に取り組めることが出来ていた。 ・決められた時間の中で思考を深めることは、生徒一人一人が考える必要な時間が足りずに、提出ボックスに投出できない生徒がいた。			
写真・資料・板書等					
・生徒の感想から 「自分の考えを比較して、自分だけで考えた意見を加えたり見直したりすることが出来た。他の意見を取り、考えることができたので歴史に対しての考えが深まった。」 「第３ラウンドで違いのように同じ意見であっても、根拠が違う意見を知ることができたし、違う意見でも納得できるものばかりで、新しい視点が自分にもできたような気がしました。」 「オクリンクで全員に公開することで恥ずかしない人の意見も知ることができたり、色々な視点の考えを自分なりに考えることができた。」 「みんなで共有することが難しくなので自分の意見を知ってもらうことができ深めることができた。友達との交流がどれだけ大切か自分の考えを言うことが大切が分かりました。」					

中学校２年　社会

ＩＣＴ　活用事例

日付	７月　８日	学年	６年	単元名	Let's go to Italy.
		教科	外国語		
本時のめあて		おすすめの周・建物・場所を紹介しよう。			
ＩＣＴの活用	活用したアプリケーション等	ミライシード・teams・その他（　　）			
	活用した機能	オクリンク			
	目的	事前の目標の確認・共有化、単元の終末と異じ形式での表現練習			
授業の流れ（UDの視点）［ICT］		成果と課題			
①（前）相方がオクリンクを通して資料を選んでくれた「どこのなにでしょうクイズ」をみて考えたり、その場の状況を知る。（誘惑に負ける）［ICT］ ②○○ is a nice country. You can see… ③（実）（前）「どこの国でしょうクイズ」で見たものを日記書き。オクリンクで友達に発信し、その資料を使って友達とおすすめの国の紹介を練習する。［ICT］ ④（後）次ではしたことの中から、言ったことを元ネタ書きにおすすめの文を書きましょう。 ⑤（後）自分の紹介したい国を選んで調べ、オクリンクを用いて資料を作成する。［ICT］ ⑥オクリンクで作成した資料を通におすすめの国についてプレゼンテーションする。［ICT］		・最初の練習に集中のあまりとまりすぎてゴールのイメージを知覚あいまいなままで、授業は目標を明確にイメージして思考の整理に取り組むことができた。 ・オクリンクを新しくもってきて、たくさんの資料を見せて、様々な国の魅力を知りながら最終的な魅力を知ることができた。			
写真・資料・板書等					

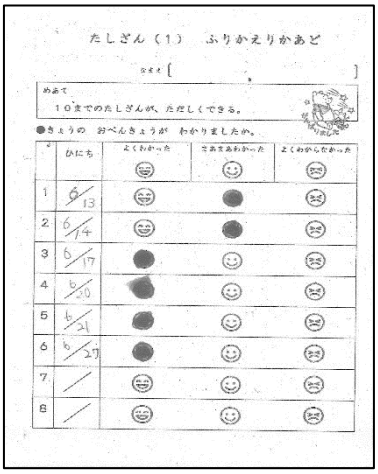
小学校６年　外国語

に活用することが大切である。例えば、効果的に視覚的情報を提示することで児童生徒の学習意欲を高めたり、具体的に理解したりできるようになる。また、互いの考えを伝え合ったり確認し合ったりすることで、考えを深めたり、自分の考えを補ったりすることもできる。このように、ICT 機器を活用した授業実践について、「ICT 実践事例集」（別掲資料②）として蓄積することで、様々な教科や学年において ICT 機器の活用を図る一助とした。実践事例集を作成し、共有することで、教科等を超えた効果的な ICT 機器活用の実践を知り、授業改善につながったと考える。

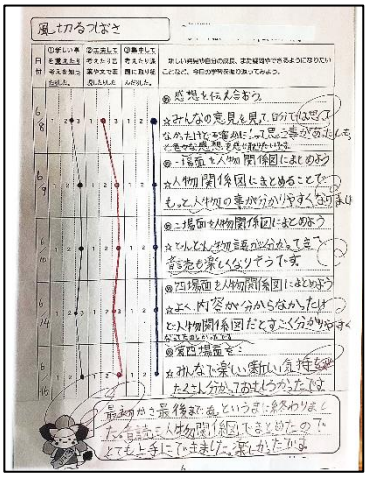
○ 振り返り活動の充実

学習課題に取り組む主体性や、学びを次につなげる自己調整力を高めるために、視点を明確にした振り返りを行った。振り返りは、めざす児童生徒の姿や教科等の特性、発達段階などに応じて、文章記述や類似問題による確認、友達への説明など、多くの手法が考えられる。本研究においては、自らの学びの過程について振り返ることができることを目標として、「単元を通して振り返りができること」、「数値や記号などで自己評価ができること」の２点を意識しながら取り組むこととした。

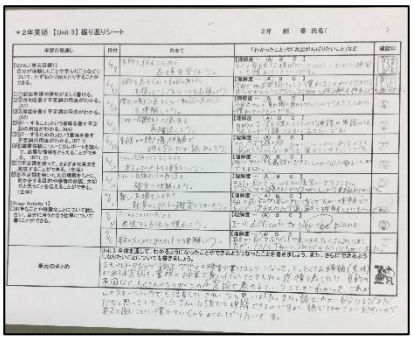
振り返りの例



小学校１年　算数



小学校６年　国語



中学校２年　英語

イ　成果と課題

○ 成果

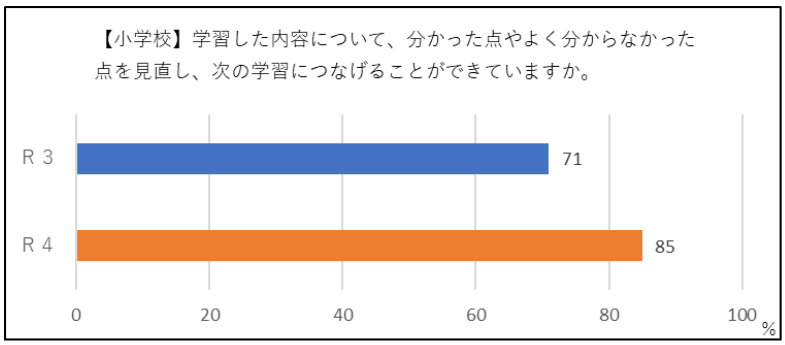
・授業の UD 化、個別最適な学び、協働的な学びをめざした ICT 機器の活用

効果的に視覚的情報を提示することで児童生徒の学習意欲を高めることができた。また、タブレット端末のアプリ（ミライシード）を活用することで、児童生徒同士の意見を共有でき、学習内容をより深めることにつながった。全国学力・学習状況調査児童質問紙における「学習の中で ICT 機器を使うのは勉強の役に立ちますか」という設問に対して、9 割以上の児童が肯定的に回答しており、児童自身もよさを実感していることがうかがえる。

また、中学校の学校評価アンケートの「学校は、話し合い活動や発表などの意見の交換を通して学習を深める授業を行っている」については、87%と高い数値を示した。個別最適な学びと協働的な学びが実践できていると考えられる。

・自己調整力を高める振り返り活動

自らの学びの過程について振り返ることができることを目標とした振り返り活動を取り入れることで、子ども自身が学習の達成度を可視化し、見通しをもちながら取り組むことができ、学びを次につなげる自己調整力の向上につながった。全国学力・学習状況調査児童質問紙における「学習した内容について、わかった点や、よくわからなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」という設問について、肯定的に回答した児童の割合が、令和 3 年度調査は 71%だったのに対



R 4 全国学力・学習状況調査児童質問紙より

して、令和４年度は、85％に向上している。また、発達段階や教科の特性に応じた振り返り活動のあり方について、校種を超えて議論できたのは大きな成果であったと言える。

○ 課題

・言語活動の充実と深い学びの推進

全国学力・学習状況調査について、小中合同で誤答分析を行った結果、根拠や理由を明らかにして記述する力に課題があることが浮き彫りとなった。ICT 機器の活用による操作活動や発表場面では、ICT の視覚的効果により内容が聞き手にわかりやすくなることから、言語活動がおろそかになってしまうことが危惧される。今後は、自分の考えを表現したり、学習内容を整理したりする場面においてデジタルとアナログを効果的に関連づけ、言語活動の充実をはかっていく必要がある。加えて、ICT 機器の活用については、一人一台端末が導入されて間もないこともあり、まだまだ改善の余地があると言える。

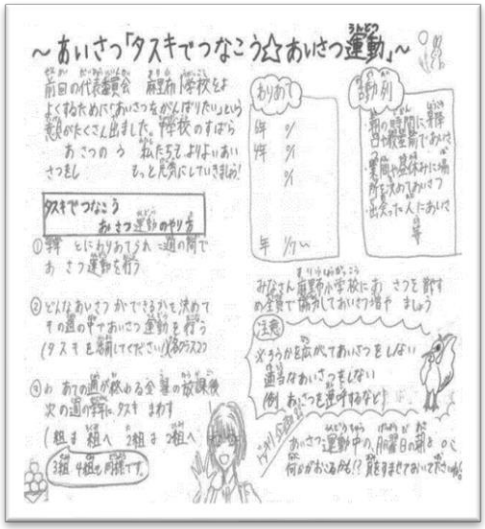
一方、全国学力・学習状況調査生徒質問紙の結果によると、個別最適な学びや協働的な学びについては、約８割の肯定的な意見があることから、一定の効果があったと言える。これに満足することなく、今後も、基礎基本の習得と活用場面を組み合わせた深い学びを進めていきたい。

③心と体の教育部

部会のテーマ

児童生徒が自己肯定感、自己有用感を感じ、「たくましい心と体」を育成するための学びの基礎作り

ア　取組の概要



○　「心の部」の取組

・小中合同あいさつ運動

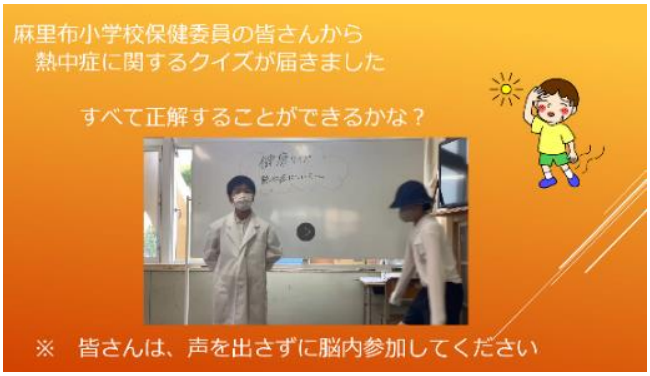
これまでも実施してきた小中合同あいさつ運動では、小中におけるあいさつに関する意識の向上を図った。中学生のあいさつの様子を動画にまとめ、それを小学校の児童が昼の放送で視聴した。その中で、自分たちのあいさつについてふり返るとともに、中学生のあいさつを手本にし、自分たちにも取り組めるあいさつをクラスで話し合い、具体化して全校で取り組んだ。

・小中合同授業の実施

「SNS によるいじめ防止」に向けた、小中合同授業を実施した。これは、中学２年生と小学５年生で意見交換を通して、SNS のトラブルをなくしていくためにはどうしたらよいのかを具体的に考え、これからの生活に生かしていこうという取組の一環である。

○　「体の部」の取組

・熱中症の注意喚起



小中の養護教諭で連携し、体育祭前に熱中症の注意喚起を行った。当初は対面での実施も検討していたが、新型コロナウイルス感染症の感染状況が悪化したことから、小学生が作成した動画を中学校の保健委員が作成したスライドに盛り込んだものを視聴する形とした。

・小中合同体育授業

体力向上を目的とした、小中合同授業（保健体育科・体育科）を１学期に実施した。事前に行った小中合同オンライン授業では、マット運動で小学生が実施する技を中学生が画面越しに視聴し、小学生に向けて中学生が助言を行う形で授業を実施した。本授業研究会における授業では、実際に中学生が小学校を訪れ、小学生たちの課題に向けた指導を行う予定である。

○　「環境」の部

・タブレット端末使用ルールの作成

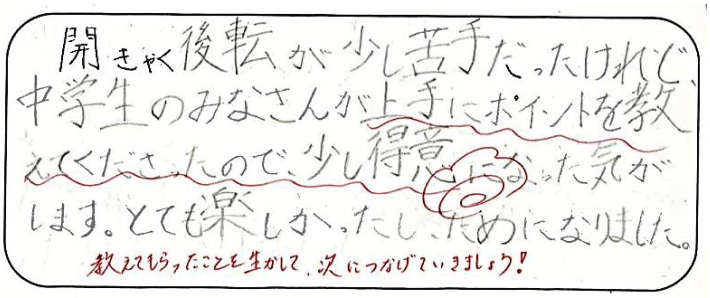
昨年度より GIGA スクール構想の一環として１人１台のタブレット端末 を使った学習が本格化していることからも、ICT 環境の整備を軸として取組を行った。まず、系統立てた指導が行えるようにルールについて小学校・中学校で見直しを実施した。小中独自で作成しているタブレット端末の使用のルールが学年に応じたルールになっているか見直し、小学校低学年・小学校中、高学年、中学校という３つの枠でルールを再構成し、児童生徒への指導を行った。（「小中連携のためのタブレットルールブック」別掲資料③）また、小学校低学年には、タブレット端末の使用の仕方が視覚的に理解できるように、イラストが入った掲示物を作成し、児童が常に見えるところに掲示した。

イ　成果と課題

○ 成果

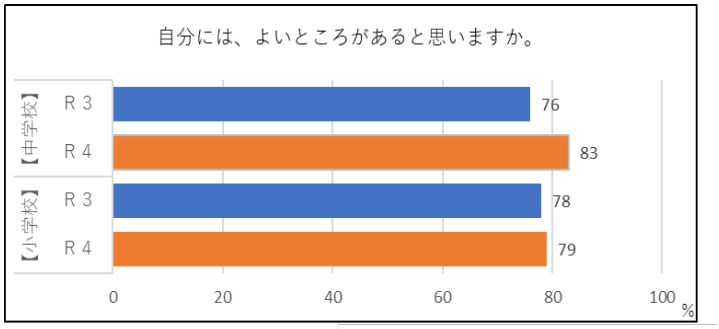
・自己肯定感の高まり

あいさつ運動では、小学生が中学生のあいさつの様子を目の当たりにすることで、普段のあいさつや号令に対する意識が変わり、場に応じたあいさつを実施する児童が増えた。また、小中合同体育授業では、オン


開きゃく後転が少し苦手だったけれど、中学生のみなさんが上手にポイントを教えてくださったので、少し得意になった気がします。とても楽しかったし、ためになりました。
教えてもらったことを生かして、次につなげていきましょう！

ラインを活用しながら、交流することができた。教えてもらうことで、取組への意欲が高まった児童も見られた。さらに、児童へアドバイスをすることで理解が深まったり、自分が役に立った実感を得たりする生徒も見られた。

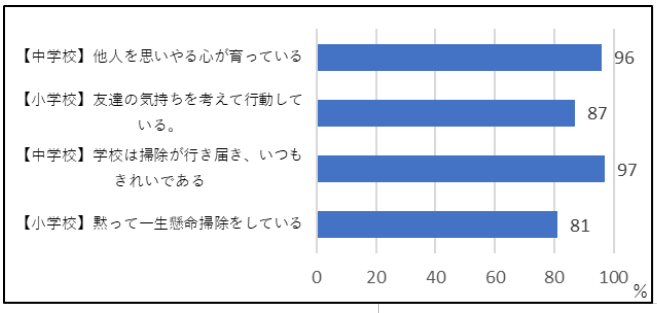
このように、自分や友達、先輩、後輩の存在を認め合う小中一貫教育を進めることで、自己肯定感が向上していると考えられる。全国学力・学習状況調査児童生徒質問紙における「自分には、よいところがあると思いますか」という設問に対して、肯定的に回答した児童生徒は、小中ともに、令和３年度の数値を上回っている。



Ｒ４ 全国学力・学習状況調査児童生徒質問紙より

・心の教育の充実

小中合同のあいさつ運動や合同授業等を通して、ともに活動をすることで、小学生はあこがれの気持ちをもち、中学生は手本となる自覚をもつなど、相乗効果が見られた。



Ｒ４学校評価アンケート結果より

各校の学校評価アンケートによると、情操面については、小中ともに、例年と変わらず８割以上の肯定的な回答結果であることから、心の教育は充実していると考えられる。

○ 課題

・小中の交流の広がり

あいさつ運動や合同授業など、小中が交流する場面を多くもつことができた。その

中でも、対面による取組だけでなく、オンライン等の活用により、交流の幅も広がってきている。こうした取組をきっかけに、さらに小中のつながりを深めていきたいと考える。

また、現在継続中の取組も多いことから、今後は児童生徒にアンケートをとるなどして 2 年間の研修の取組について検証を行い、継続的に深化・充実を図っていくようにしたいと考えている。さらに、児童生徒の実態に応じた指導について、今後も小中で協議を重ね、連携を図りながら指導にあたっていきたい。

４　公開授業指導案

（１）ふるさと学習部　総合的な学習の時間　いわくにまちづくりプロジェクト

（２）学力向上部　　国語　　ごんぎつね

（３）心と体の教育部　体育・保健体育　　陸上競技

第５学年４組　総合的な学習の時間学習指導案

日　時　令和４年 11 月７日（月）５校時
場　所　５年４組教室
指導者　廣本　康恵

1　単元名　いわくにまちづくりプロジェクト（全４０時間）

2　本単元で求める姿

地域のよさや活性化に関わる人々の思いや願いに気付くとともに、住みやすいまちとはどんなまちなのかについて話し合い、地域での活動に進んで参画したり自分にできることを考えたりすることができる。

3　単元の目標

知識・および技能	思考力・判断・表現等	学びに向かう力、人間性等
・岩国のまちづくりを推進している人々の思いや願い、努力や工夫に気付くことができる。	・商店街やまちづくりに携わる人々の思いをふまえて、課題を設定し、解決方法や手順を考え、見通しをもって情報を整理し、まとめをすることができる。	・探究的な学習を基に「自分にできることは何か」という視点をもって活動したり、進んで地域の方々や社会に関わろうとしたりすることができる。

4　単元の構想

(1)　児童について

本学級の児童３６名（男子１８名（特支２名）、女子１８名）は、何事にもまじめに取り組み、協力しながら学校生活を送っている。生活科の学習においては、地域と関わり、自分にとってお気に入りのもの・こと・人などを見つけてきている。総合的な学習の時間においては、3 学年では「地域めぐり」の学習を通して、地域の良さに気付いたり、点字や手話体験からいろいろな人の立場を考えたまちづくりについて考えたりすることができている。4 学年では「環境」の学習を通して、地域の現状と環境保全や生活改善に取り組む人々の願いを理解し、環境の改善の必要性を考えることができた。これまでの生活科や総合的な学習の時間において、課題をもってそれを探究することは多く経験している。

1 学期には、本単元の「発見岩国のまちづくり」に取り組み、自然が豊かであることや外国人との交流ができる場所があるなど様々な岩国の良さと課題を見つけた。その中で課題として商店街の問題を取り上げ、商店街からゲストティーチャーを招いて商店街の歴史や現状を知ることができた。商店街が賑わう場所になるための「軽トラ新鮮組！」の取組に興味をもった児童は多く、実際に月に一度開催される「軽トラ新鮮組！」に参加してきた児童もいる。「軽トラ新鮮組！」にむけての学習では、「お店を開くのが役目でなく岩国を活性化させるのが本当の目的で、どうやったら人が集まるのかを考えることが大切だ」という意見を出し合うことができた。

(2)　教材について

本単元では、探究課題を「地域の活性化に携わる組織や人々とその思いや願い」と設定した。児童が住んでいる麻里布地区は岩国駅を中心に商店街がひろがる場所である。現在、岩国市では、中心市街地のまちづくりに取り組む計画がある。商店街のことを知っている児童はほとんどだが、地域にスーパーマーケットや複合型店舗があるため、普段から商店街を利用する家庭は少ない。そこで、商店街の方々の思いや願いを実現していこうとする活動をすることで、自分事として地域の商店街が抱える課題について考えることができると考えた。児童が主体的に取り組める体験活動を重視し、実際に見たり聞いたりする場面を多くすることで、体験から良さを実感し、探究的な学習のプロセスを繰り返すことができると考える。

さらに、地域と関わる中で持続的に地域をよくする方法を考え、今後も社会に目を向けていく児童を育てることができる教材であると考える。課題解決のために、地域の方の力を活用することも設定できる。このような主体的な活動の中では、比較する力や関連付ける力を中心として、問題解決に必要な資質・能力を活用しながら、願いを実現しようとする態度を育てることができる。

(3)　指導について

本単元の学習にあたっては、次のことに留意したい。

○　商店街や岩国のまちづくりに関わっている方をゲストティーチャーとして招き、岩国を活性化するための話を聞くことを通して課題を明確にし、児童が意欲をもって最後まで探究活動に取り組めるようにシラバスを児童と作成していきたい。　【共有化】

○　課題解決のために、持続性をもたせる体験活動や調べ活動を通して、発見したことや気付き、疑問に思ったことを出し合い、思考ツールを活用し目的に従って友達と整理分析させることで、考えを見直したり深めたりさせる。また、考えたことや学んだこと、疑問やよく分からなかったこと、みんなの考えがまとまらなかったことなど振り返りに書くことを通して、次の課題へつなげていくようにする。　【視覚化】

○　国語科、社会科、図画工作科、家庭科など他教科との関連を図る。

○　「軽トラ新鮮組！」や、「岩国にぎわい創出施設」の取組を通して、岩国のまちづくりについて話し合い、地域の一員として、自分に何ができるかを考えさせていく。　【焦点化】

5　単元の評価基準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①商店街の魅力と商店街で店舗を経営する人たちの努力や工夫に気付くことができる。 ②「岩国にぎわい創出施設」の計画をもとにまちづくりを推進している人々の思いや願いに気付くことができる。	①商店街やまちづくりに携わる人々の思いをふまえて課題を見出している。 ②「軽トラ新鮮組！」にむけて、商品や人が集まるためのアイディアを考えることができる。 ③住みやすいまちとはどんなまちなのか情報を収集し、話し合うことができる。 ④調べたことやわかったことを新聞やプレゼンボードにまとめることができる。	①「軽トラ新鮮組！」にむけて、どんな商品なら売れるか、どうすれば人が集まるのか粘り強く、他者と関わりながら問題解決しようとしている。 ②住みやすいまちづくりについて、よりよい方法を考えるために、自分の思いや考えを出し合うことができる。 ③進んで地域の方々や社会に関わろうとするとともに学んだことを生活に生かそうとしている。

6　単元の指導計画　（全 40 時間）

探究の過程	○学習活動・児童の思考	・指導上の留意点	時数
発見岩国のまちづくり			
課題	○　岩国について今まで行ったところや知っていることについて話し合う。 ・近くに白蛇神社があるね。 ・山や川、海があり自然に囲まれている。 ・駅前に商店街があるね。 ○　住みやすいまちとはどんなまちなのか話し合う。 ・映画館がほしいな。 ・遊ぶ場所がほしいな。 ・安心できる場所がいいな。	・今までに行ったところや、知っていることについて考えさせ、岩国への関心を高めることができるようにする。 ・住んでいる地域や学校の周りに注目させることで、身近なところにある岩国の良さに気付くことができるようにする。 ・イメージマップを活用することで、住みやすい町とはどんな町なのか自由に出し合い、課題につなげることができるようにする。	2
情報収集	岩国の良さと課題を知ろう ○　岩国の良さと課題について調べる。 ・自然が多いね。・空港があるね。 ・商店街で買い物をする人が少ないね。 ○　商店街の調査や商店街の藤田さんの話を聞き、商店街の歴史や現状について情報を集める。 ・商店街を活性化するためにどんなことができるのだろうか。	・インターネットや本を使って調べ、見つけたことをメモすることで、岩国の良さと課題に気付くことができるようにする。 ・商店街について家の人にインタビューすることで、買い物の現状を捉えることができるようにする。 ・商店街でお店をされている藤田さんの話を聞くことで、商店街の歴史や賑わいの場所にするための工夫や努力を捉えることができるようにする。	3
整理分析	○　調べ活動で得た情報や、まちづくりに従事している方からの情報を整理し、地域の現状を捉える。 ・「軽トラ新鮮組！」についてもっと知りたいな。 ・商店街を賑わいのある場所にするためにどんなことをしているのだろう。	・目的に応じた思考ツールを使い、商店街の良さと課題を顕在化することで、地域の現状を捉えることができるようにする。（マンダラチャート・Y チャート） ・商店街を活性化するためにどんな方法が考えられるかの話し合い活動を取り入れる。	3

まとめ ふりかえり	○　商店街の様子(利用する人が少ない)や地域が抱える課題から地域のために自分たちができることに取り組みたいという思いをもつ。 ・地域の現状は、元気や活気がない。自分たちのふるさとのために何かできることをしたい。どんなことができるだろうか。	・商店街の歴史や商店街を活性化するためにどんな方法があるのか学んだこと、疑問に思ったこと等を振り返りに書くことで、次の課題へつなげていくことができるようにする。	2
商店街へGO			
課題	○　商店街を人で賑わう場所にするために、できることを考える。 ・「軽トラ新鮮組！」に出店しよう。	・軽トラ新鮮組に出店するためにどんな工夫をしたらよいか考え、活動の見直しをもつことができるようにする。	1
情報収集	「軽トラ新鮮組！」に挑戦して、商店街を人で賑わう場所にするためのヒントを得よう！ ○　地域の特産品を使った商品を考えたり、自分たちにできそうな商品の開発をしたり、必要な情報を収集したりする。 ・「軽トラ新鮮組！」に出店するために、どんな商品を作ったらよいかな。 ・人があつまるためにイベント(ダンスやリコーダーの発表)やゲームコーナーを作ろう。 ・どんな飾りが必要かな。 ・チラシやポスターを作ろう。 ・商品の値段や袋詰めはどうすればよいだろうか。	・どんな商品を作るかを考える時に、材料や値段、買う人のことを考えなければ売ることが難しくなることに気付くことができるようにする。 ・人が集まる場所にするためにどんな仕事があるか話し合う場を設定することで、出店を出して地域を盛り上げていくためには役割分担しなくてはいけないことに目を向けることができるようにする。	3
整理分析	○　地域の方から教えていただいたり、自分たちで考えたりしながら商品をつくる。(図画工作科・家庭科) ・商品をよりよくするための情報を地域の方からアドバイスを受けながら作成しよう。 ○　飾りを作ったり、ポスターやチラシを作ったりする。 ・たくさんの人が来てくれるように仕事をしよう。	・地域の方に教えていただいたり、保護者ボランティアを募集したりすることで、多様な立場の人々にアドバイスをもらいながら商品を作成することができるようにするとともに、多様な他者とともに協働することの楽しさを実感できるようにする。(図画工作科・家庭科) ・「軽トラ新鮮組！」を成功させるためには、地域の方と協力することで人が集まる場所になることに気付くことがで	6 (2)

	○　商品の値段をつける。 ・材料費はいくらかかったかな。 ・いくらで売ったらいいのだろう。	きるようにする。 焼き物（はしおき）　陶芸家岩本さん 羊毛フェルト（ブローチ）　佐古さん 紙漉き（はがき）　大竹和紙保存会 宮本さん 蓮の飾り　シェーバーさん 小物作り　ミシンボランティアさん 古市先生（由宇小学校） 活版印刷　松井印刷松井さん 山代文化保存会の方 橋本さん	
まとめ ふりかえり	○　「軽トラ新鮮組！」に出店する。 ・人があつまるための工夫として、呼びかけが必要だとわかった。	・「軽トラ新鮮組！」に参画することで、商店街の人々の努力や願いに気付くことができるようにする。 （１０月第３日曜日） ・人があつまる場所にするためには何が必要だったのか皆で確認することで、一人ひとりが目的意識をもって活動できるようにする。 ・目的と照らし合わせながら振り返りを行うことで、次の課題へつなげていくことができるようにする。	2
輝くまち岩国			
課題	○　「軽トラ新鮮組！」の活動を振り返り、もっと地域を元気にしたいという思いをもつようにし、あらたな課題を見出す。 ・住みやすいまちとはどんなまちなのかを考えるプロジェクトに取り組もう。	・「軽トラ新鮮組！」の活動の振り返りから、もっと地域を元気にしたいという思いをもつようにし、新たな課題を見出すことができるようにする。	1

	住みやすいまちとはどんなまちなのかを考えるプロジェクトに取り組もう。		
情報収集	○　地域で取り組まれている「岩国駅周辺地区グランドデザイン」でどんなことが行われているのか、調べる。 ○　まちなかデザイン班の田中さんに「にぎわい創出施設」について話を聞く。 ・自分たちの力で開設できそうなプロジェクトを考え、そのための準備を進めよう。	・「岩国駅周辺地区グランドデザイン」でどんなことで行われているのか、事前にインターネットを使って調べておくことでインタビューをする際に、岩国でどんなまちづくりを考えられているのか捉えることができるようにする。 ・未来の岩国を考える活動をされている方の話を聞くことで、岩国のまちづくりについて興味をもって考えることができるよう支援する。	4
整理分析	○　住みやすいまちや地域が元気になるためにできることを整理し、まちづくりを考える。 ・自然がいっぱいのまちづくりをしたいな。 ・たくさんの人と交流できるといいな。 ・人が集まる工夫が必要だな。 ・自然が多いといいな。 ・お年寄りにも過ごしやすい場所になるといいな。 ・障害をもっている方が住みやすいというのはどういう町なのだろうか。 ・小さい子どもたちが遊べる場所もあるといいな。 ・学生や大人が学ぶ場所もあるといいな。 ・音楽を聴いたり、映画や劇を観たりする場所があるといいな。 ・スポーツもしたいな。 ・外国の人との交流の場所もあるといいな。	・いろいろな立場の人にとって住みやすいまちであることを考えるために地域の方にアンケートをとり、住みやすさについて考えることができるようにする。 ・班ごとにテーマを決めることで、それを意識して、まちの模型を作ることができるようにする。また、作っている過程で、適宜テーマを意識させる場を設けることで、テーマと融合性のある模型のあり方について検討できるようにする。 ・自分たちのテーマと模型のつながりを関連づけ、模型のようなまちをつくることでもたらされる効果（予想）等を意識して、プレゼンボードを作る場を設定することで、自分たちの町への思いや願い、アイディアを論理的に、わかりやすく伝える工夫をすることができるようにする。	6 （2） 本時

まとめ ふりかえり	○　岩国の未来を考えるためには、自分たちがもっと地域のよさを知ることが必要であることに気付き、地域のことについてさらに調べていこうとする。 ・もっともっと地域のことを調べて、自信をもって紹介できるようにしたい。	・今までの学習を振り返ることで、住みやすいまちとは、誰もが「安心できる」、「楽しめる」、「交流できる」場であるとよいことに気付き、地域のことをさらに調べていきたいという思いをもつことができるようにする。 ・次の課題として、今まで調べたことや学んだことを地域の方や他の学年に伝えるためにどうすればよいかを考えることができるようにする。	2
未来へGO			
課題	○　今まで学習したことをまとめ、これからの岩国がどうあるべきかを伝えていきたいという新たな課題をもつ。	・未来の岩国がどうなってほしいか、今までの学習をもとに考えることで、地域の活動に進んで参画したり、自分事としてできることを新たな課題として考えることができるようにする。	1
情報収集	これからの岩国のまちづくりについて考えたことを伝えていこう。 ○　今まで調べたことや体験したこと考えたことについての資料を集める。	・「軽トラ新鮮組！」や「住みやすいまちづくり」の取組から、まちの模型やプレゼンボードを使って、岩国が活性化するために必要なことを新聞やプレゼンボードにまとめることでプレゼンテーションできるようにする。	2
整理分析	○　「いわくにまちづくりプロジェクト」を通して考えた岩国のまちづくり」ついてまとめる。 ・どのような伝え方が、効果があるだろう。	・他学年の児童や地域の方にわかりやすい伝え方を考えさせることで伝える相手に応じた伝え方や関わり方等について意識しながらプレゼンテーションができるようにする。	3
まとめ ふりかえり	○　ふるさと学習発表会を開催し、他学年の児童や地域の方に学習したことを紹介する。 ・総合的な学習の時間を通して友達や多くの地域の人々とつながり、地域のよさを調べたり発信したりして、自分と地域がつながった気がする。今後も、地域のためにできることを考えて、どんどんチャレンジしていきたい。	・今まで学習したことを、わかりやすく伝える工夫をする。 ・未来の岩国がどうなってほしいか、今までの学習をもとに考えることで、地域の活動に進んで参画したり、自分事としてできることを考えたりすることができるようにする。	3

7　本　時

(1)　主眼　「住み続けやすいまちとはどんなまちなのか」について話し合う活動を通して、自分たちが住んでいる地域が住み続けやすくなるために必要なことを考えることができる。

(2)　準備物　敷地模型　タブレット　ふせん　プレゼンボード（スケッチブック）

(3)　学習過程

学習活動・内容 ○予想される児童の反応	○教師の働きかけ 評価　（方法）
1　今までの活動を振り返る。 ・　めあての確認 ○　「住みやすいまちとはどんなまちなのか」について考えてきたことを思い出す。 2　本時の課題を知る。	○　前時までの学習を振り返り、本時の課題につながる内容のものを紹介する。
住み続けやすいまちとはどんなまちなのだろうか。	
3　グループごとにまとめたものをプレゼンボードで発表をする。 ・　住み続けやすいまちについての考え ○　子どもが楽しめる場所を作ったよ。 ○　こんなお店があったらいいな。 ○　子どもも大人も学べる場所があったらいいな。 ○　安らげる場所として緑（自然）や花があるといいな。 ○　スポーツができるといいな。 ○　外国の人と交流する場所があるといいな。 4　グループで考えた企画から住み続けやすいまちを全体で共有する。 ・　誰でも安心して暮らせるまちづくりとは ○　障害を持った人も楽しめるといいな。 ○　広場があるといいな。 ○　キーワードは「誰でも安心して暮らせるまち」かな。 ○　みんなの願いは生かされているだろうか。	○　グループごとに発表する。（テーマ別） ICT 活用 **各グループで考えた企画を全体で共有するために敷地模型やプレゼンボードを使って住み続けやすいまちとはどんなまちなのかアイディアや理由を説明させる。【視覚化】** ○　発表を聞いたあと、良いところや、疑問に思ったことなどを質問や意見の場として交流をさせて企画の見直しにつなげさせる。 評　情報を集め、関連づけながらまとめている。 ○　アドバイザーの方から岩国を活性化させるポイントや住みやすさについて意見をもらうことで、今までの活動で学んだことをもとに意見をつなげるようにさせる。 商店街　藤田さん まちなかデザイン班　田中さん ○　住み続けやすいまちはどんなまちなのかキーワードとなる言葉を考えて意見を出し合う。 ○　イメージの共有（どんな人たちが暮らすのか。）が必要なので、今までの学習を思い出させる。
5　本時の活動を振り返り、次時の活動の見通しをもつ。 ・住み続けやすいまちづくりに必要なキーワード	評　粘り強く課題解決に取り組もうとしている。 振り返り **アンケートの項目を示すことで住み続けやすいまちづくりについて考えたことを振り返ることができる。**

第４学年３組　国語科学習指導案

日　時　令和４年 11 月７日（月）５校時
場　所　４年３組教室
指導者　廣實　貴恵

１　単元名　読んで考えたことを伝え合おう「ごんぎつね」

２　本単元で求める姿

児童が，中心人物と対人物の関わりを考えながら，心情がどのように変化しているかを捉え，それに基づいて感想や考えをもつことができる。

３　単元の目標

知識及び技能	思考力,判断力,表現力等	学びに向かう力，人間性等
・様子や行動，気持ちや性格を表す語句の量を増し，話や文章の中で使うとともに，言葉には性質や役割による語句のまとまりがあることを理解し，語彙を豊かにすること。 言葉の特徴や使い方に関する事項オ	・登場人物の気持ちの変化や性格，情景について，場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像すること。 読むこと（１）エ ・文章を読んで理解したことに基づいて，感想や考えをもつこと。 読むこと（１）オ ・自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして，書き表し方を工夫すること。 書くこと（１）ウ	・これまで学習したことや読書経験を振り返って学習課題を明確にし，学習の見通しをもって，粘り強く感想や考えをもち，伝え合おうとしていること。

4　単元の構想

（1） 児童について

本学級の児童は，これまで国語科の学習において，本文の叙述をもとに，物語の山場を探したり，中心人物の心情変化のきっかけを捉えたりする学習をしている。その際，心情を表す言葉や行動描写から手がかりを探して，中心人物の心情がどのように変化しているのかを読み取るようにしてきた。

第４学年「走れ」の学習では，物語の中で起こる中心人物の心情の変化とその理由を想像しながら，内容を読み取る学習を行った。その際，心情を表す言葉を的確に捉え，中心人物の心情を書き表すことができた。一方で，行動描写が心情に結びつかず，変化のきっかけを見つけることが難しい児童も見られた。

（2） 教材について

本単元の重点指導事項は，学習指導要領における「思考力，判断力，表現力等」の「C　読むこと」（1）オ「文章を読んで理解したことに基づいて，感想や考えをもつこと。」である。そのためには，「C　読むこと」（1）エ「登場人物の気持ちの変化や性格，情景について，場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像すること。」の指導が不可欠である。本単元では，中心人物とそのほかの人物にどのような関わりがあり，その関わりによって，中心人物がどのように変化していくかについて学習し，自分の感想や考えをまとめる。

本教材は，中心人物の心情が，ほかの人物との関わりを通じて変化するが，その心情が対人物には伝わらず，すれ違いが起きてしまう物語である。中心人物の心情が行動描写や心内表現に多く表れており，心情変化が捉えやすい。また，情景にも心情を表すものが多くあり，文章表現の効果を味わうこともできる。

これらのことから，本教材は，中心人物の心情の変化が，どのような関わりによってもたらされたのか，複数の叙述をもとに，具体的に捉え，自分の考えや感想をまとめることに適した単元であると考える。それらの内容を理解した上で，自分の考えや感想をまとめられるようにしていきたい。

（3） 指導について

指導にあたっては，研究主題と関わって，次の点に留意する。

○　物語の流れを捉えるために，センテンスカードや挿絵の並べ替えを行う。【焦点化】❶

○　わざと違う文を提示し，そのしかけ文と原文の表現効果を比べることで，情景描写の効果を考えられるようにする。【焦点化】❷

○　ごんマップを作り，後ろに掲示をしておくことで，場面ごとのお互いの関わりをいつでも見返すことができるようにしておくことで，いつでも見返すことができるようにしておく。【焦点化】❸

○　情景描写をイラストや写真で提示することで，視覚情報から情景を理解することができるようにする。【視覚化】❶

○　ごんと兵十の関わりを動作化することで，だんだん兵十との距離が縮まっているということに気付かせるようにする。【視覚化】❷

○　物語の設定を捉えやすくするために，思考ツールを活用する。【視覚化】❸

○　中心人物の心情変化を視覚的に捉えられるように，三段構成図を活用する。【視覚化】❹
○　自分の立場や考えを明確にするために，自分の考えに合ったカードを選び，オクリンクで提示する。【共有化】❶
○　児童のノートやワークシートを撮影し，画面を見せることで，書き方で悩んでいる児童が参考にしたり，お互いの考えの相違点を見つけたりすることができるようにする。【共有化】❷

5　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①　様子や行動，気持ちや性格を表す語句の量を増し，話や文章の中で使うとともに，言葉には性質や役割による語句のまとまりがあることを理解し，語彙を豊かにしている。	①　「読むこと」において，登場人物の気持ちの変化や性格，情景について，場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像している。 ②　「読むこと」において，文章を読んで理解したことに基づいて，感想や考えをもっている。 ③　「書くこと」において，自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして，書き表し方を工夫している。	①　学習の見通しをもち，進んで登場人物の気持ちの変化や関わりについて，自分の考えや感想を伝え合おうとしている。

6　単元の指導計画（全 12 時間）

次	学習活動	評価方法				授業の UD 化 ３つの視点
		知	思	主	評価規準	
一 つ か む	①　物語を通読して自分の考えや感想を伝え合い，学習課題を確かめる。			○	・学習の見通しをもち，進んで登場人物や結末について自分の考えや感想を伝え合おうとしている。 （主）－①	共有化❷ 視覚化❸
	人物どうしの関わりを考えよう。					
二 取 り 組 む	②　中心人物と対人物は誰かを検討し，それぞれの性格を読み取る。	○	○		・本文の中から性格を表す語句を読み取り，文章の中で使っている。 （知）－① ・登場人物の性格について，叙述と結び付けて具体的に想像している。 （思）－①	視覚化❸

	③ 第一場面を読み，叙述をもとに，ごんの行動の意味や，兵十のごんに対する気持ちを読み取る。	○	○		・ごんの様子や行動，気持ちや性格を表す語句を読み取り，話や文章の中で使っている。　（知）－① ・ごんの気持ちについて，叙述をもとに具体的に想像している。（思）－①	焦点化❶ 焦点化❸
	④ 第二場面を読み，叙述をもとにごんのいたずらに対する後悔を読み取る。	○	○		・ごんの行動や気持ちを表す語句を読み取り，話や文章の中で使っている。（知）－① ・ごんの気持ちの変化について，場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像している。（思）－①	視覚化❶ 焦点化❶ 焦点化❸
	⑤ 第三場面を読み，ごんのつぐないについてまとめる。		○		・センテンスカードを正しく並び替え，その根拠を本文から読み取ることができる。（思）－②	焦点化❶ 視覚化❸
	⑥ 第三場面を読み，兵十に対するごんの気持ちの強まりを捉える。	○	○		・ごんの様子や行動，気持ちを表す語句を読み取り，話や文章の中で使っている。（知）－① ・文章を読んで理解したことに基づいて，ごんの兵十へのつぐないの気持ちや共感に対する自分の感想や考えをもっている。（思）－②	視覚化❷ 焦点化❸
	⑦ 第四・五場面を読み，兵十と加助の会話を聞いたごんの気持ちを読み取る。	○	○		・ごんの様子や行動，気持ちを表す語句を読み取り，話や文章の中で使っている。（知）－① ・ごんの気持ちについて，兵十と加助の会話の内容やごんの言動と結び付けて具体的に想像している。（思）－①	視覚化❷ 視覚化❸ 焦点化❸
	⑧ 第一場面から第五場面までを読み，ごんの心情の変化を三段構成図にまとめる。	○	○		・ごんの様子や行動，気持ちや性格を表す語句を読み取り，話や文章の中で使っている。（知）－① ・ごんの気持ちの変化について，場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像している。（思）－①	視覚化❹

	⑨ 第六場面を読み，ごんに対する兵十の気持ちを読み取る。	○	○		・兵十の様子や行動，気持ちを表す語句を読み取り，話や文章の中で使っている。 （知）－① ・兵十の気持ちの変化や情景について，場面の移り変わりや叙述と結び付けて具体的に想像している。 （思）－①	焦点化❷ 視覚化❷
	⑩ 第六場面を読み，情景描写の効果について考える。	○	○		・兵十の様子や行動，気持ちを表す語句を読み取り，話や文章の中で使っている。 （知）－① ・兵十の気持ちの変化や情景について，場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像している。 （思）－①	視覚化❶ 焦点化❷
	⑪ 第六場面を読み，兵十のごんに対する気持ちを読み取る。【本時】	○	○		・兵十の気持ちの変化を表す語句を読み取り，話や文章の中で使っている。 （知）－① ・文章を読んで理解したことに基づいて，自分の考えについてまとめている。 （思）－③	共有化❶ 視覚化❶
三 振 り 返 る	⑫ 六場面の後半を読み，ごんと兵十の心は通い合ったのか，考える。		○	○	・ごんと兵十の気持ちの変化や関わりについて，自分の考えや感想を進んで伝え合おうとしている。 （主）－① ・自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして，書き表し方を工夫している。 （思）－③	共有化❶ 視覚化❷

7　本時（11／12 時）

（1）　主眼

兵十がごんのつぐないに気づくきっかけを考える活動を通して，兵十の心情の変化について，自分の考えをまとめることができるようにする。

（2）　準備物

三段構成図，タブレット（教師・児童），ワークシート

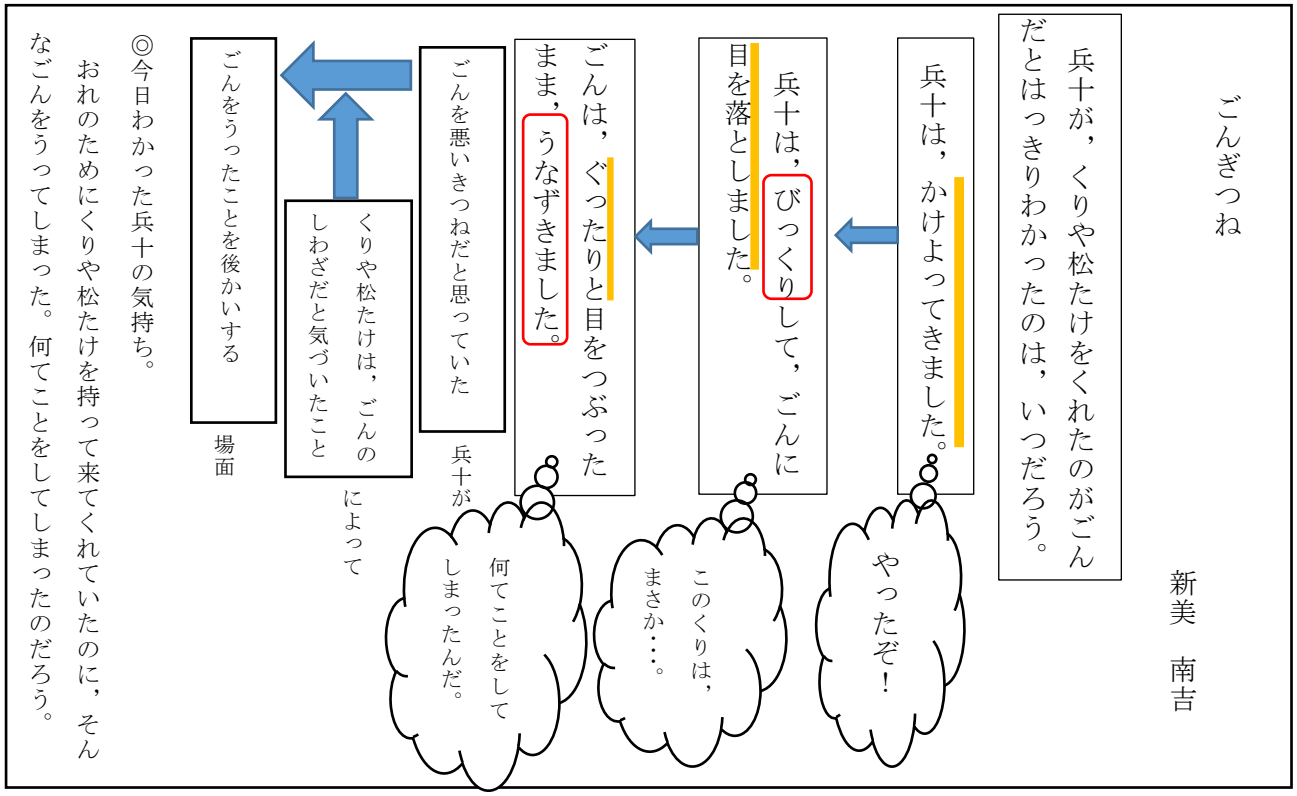
（3）　学習過程

学習活動・内容 ○予想される児童の反応	○教師の働きかけ 評価（方法）
1　前時までの学習を振り返り，本時のめあてを確認する。 ・ごんの心情変化 ○　ごんは，自分の行動を後悔して，つぐないをするようになったね。 ○　兵十は，うった後，どんな気持ちだったのだろう。	○　前時までに作成した三段構成図を活用することで，一から五までのごんの心情変化を，児童が想起しやすいようにする。【視覚化】
兵十が，くりや松たけをくれたのがごんだとはっきりわかったのは，いつだろうか。	
2　六を読み，兵十がごんのつぐないに気づいたのはいつか，自分の考えを伝え合う。 ・兵十の行動に対する自分の考え ・友達の考えとの相違 ○　くりを見つけたときに，びっくりしているから，そこで気づいたと思う。 ○　かけよった時は，まだくりに気付いていなくて，「やっつけてやったぞ。」という気持ちだったと思う。 ○　ごんが頷いて，初めてはっきりと気づいたのだと思う。	○　兵十の行動を３つに絞ることで，考えをもつことが苦手な児童でも，判断できるようにする。【焦点化】 ICT 活用 児童が選んだ考えを３種類の色別カードで示し，一覧でテレビに映すことで，全員の考えを見ることができるようにする。【視覚化】 ○　選んだ理由が書けた児童から，後ろで意見交流を行うなど，考えを伝え合う場を多くもつことができるようにする。【共有化】 技兵十の気持ちの変化を表す語句を読み取り，話や文章の中で使っている。（ワークシート）
3　兵十の心情の変化を全体でまとめる。 ・兵十から見たごんの行動 ・兵十の心情変化 ○　ごんは，何度も兵十の姿を見ているけれど，兵十は，ごんの姿を２回しか見ていないね。	○　挿絵を使いながら，ごんと兵十の目線に着目することで，気持ちのすれ違いがおこっていることに気付くことができるようにする。【視覚化】

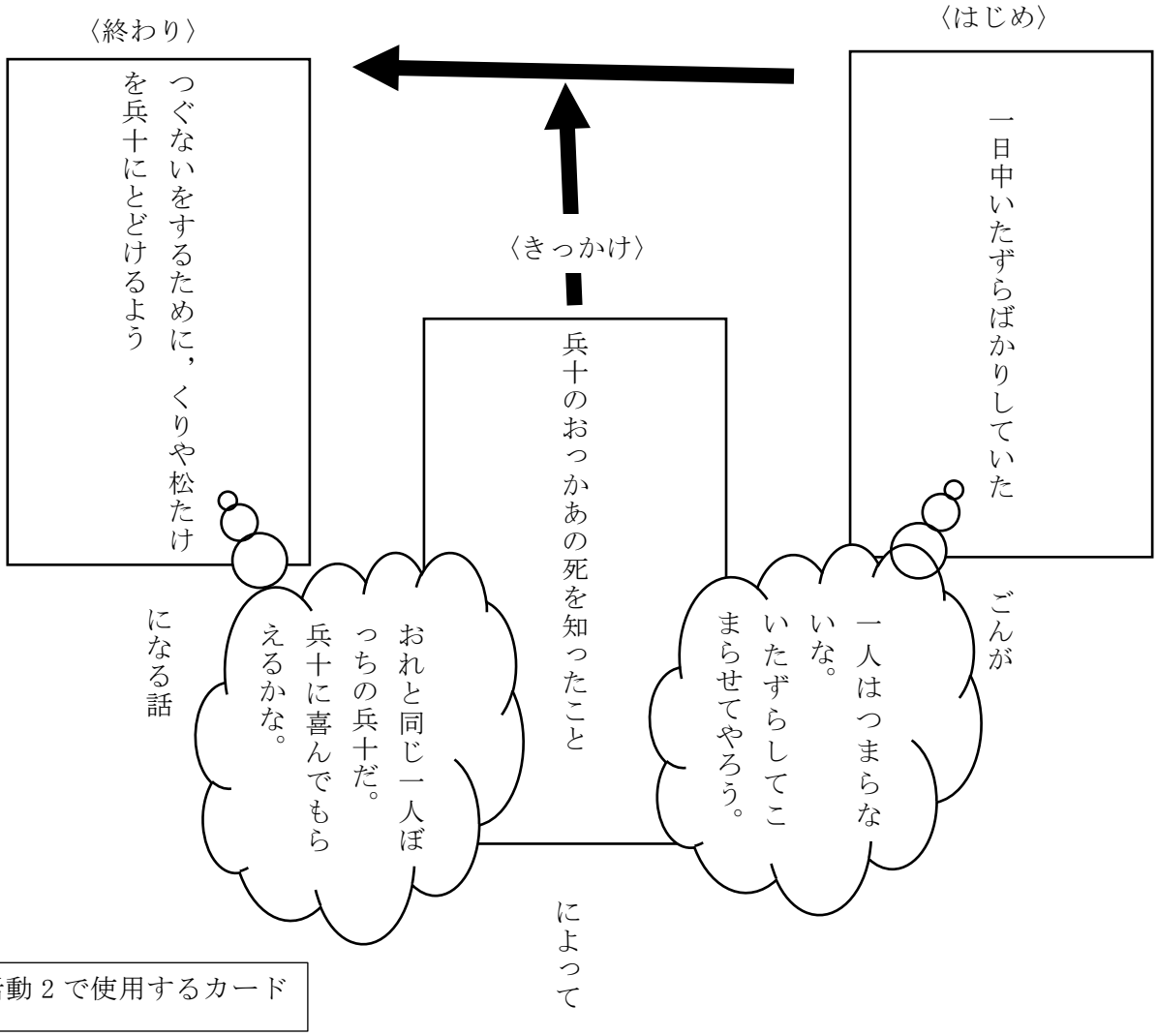
赤：兵十は，かけよってきました。
黄：兵十は，びっくりして，ごんに目を落としました。
青：ごんは，ぐったりと目をつぶったまま，うなずきました。

○　うつまでは，ずっと兵十の中では「ぬすっと」のままだったんだね。 4　本時からわかった兵十の気持ちを書く。 ・本文をもとにした自分の考え ○　本文の言葉を使って，自分の考えをまとめることができたよ。	振り返り 心内語で書くことで，兵十の気持ちに寄り添って考えることができるようにする。 思文章を読んで理解したことに基づいて，自分の考えについてまとめることができる。（ワークシート）

板書計画

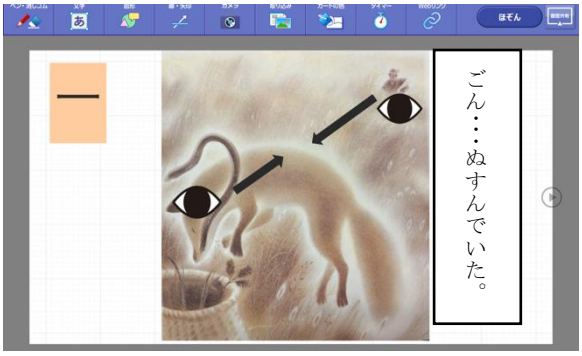


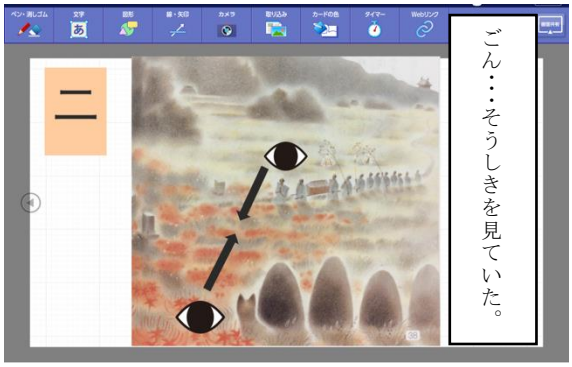
三段構成図（ごんの心情変化）



活動 2 で使用するカード

活動 3 で使用するカード





小学校第６学年３組・中学校第１学年４組合同　体育科・保健体育科学習指導案

日　時　令和４年 11 月７日（月）　５校時
場　所　麻　里　布　小　学　校　講　堂
指導者　福 永 俊 輔 （ 麻 里 布 中 学 校 ） Ｔ１
　　笹 田 幸 一 （ 麻 里 布 小 学 校 ） Ｔ２

１　**単元名**　陸上競技（走り高跳び）

２　**本単元で求める姿**

児童：既習事項と中学生や仲間からの助言を織り交ぜながら、記録の向上に向けて意欲的に活動に取り組む姿。
生徒：既習事項と自己の体験を踏まえて、児童の長所の伸長や課題の解決に向けて補助や声かけを工夫しようとする姿。

３　**単元の目標**

知識及び技能		思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
知識	技能		
＜中学校＞ ・「歩く」、「走る」、「跳ぶ」及び、「投げる」といった基本的な運動で、自己の記録に挑戦したり、競走したりする楽しさや喜びを味わうことのできる運動であることが理解できる。 ・古代ギリシアのオリンピア競技やオリンピック・パラリンピック競技大会において主要な競技として発展した成り立ちがあることを理解できる。 ・敏捷性や瞬発力が関連して高まることができる。	＜中学校＞ ・リズミカルな助走から力強く踏み切り、より高いバーを越えることができる。 ・踏み切りに移りやすいよう、スピードよりもリズムを重視した助走をすることができる。 ・跳躍の頂点とバーの位置が合うように、自己に合った踏み切り位置で踏み切ることができる。 ・脚と腕のタイミングを合わせて踏み切り、大きなはさみ動作で跳ぶことができる。	＜中学校＞ ・提示された動きのポイントやつまずきの事例を参考に、仲間の課題や出来映えを伝えることができる。 ・提供された練習方法から、自己の課題に応じて、動きの習得に適した練習方法を選ぶことができる。 ・練習や競争する場面で、最善を尽くす、勝敗を受け入れるなどのよい取組を見付け、理由を添えて他者に伝えることができる。 ・学習した安全上の留意点を、他の学習場面に当てはめ、仲間に伝えることができる。 ・体力や技能の程度、性別の違いを踏まえて、仲間とともに楽しむための練習	＜中学校＞ ・陸上競技に積極的に取り組もうとしている。 ・よい技や演技に称賛の声をかけるなど、仲間の努力を認めようとしている。 ・一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとしている。

・記録の向上に向けて、基本的な動きや効率のよい動きがあることを理解できる。		や競争を行う方法を見付け、仲間に伝えることができる。	
＜小学校＞ ・走り高跳びの楽しさや喜びを味わい、その行い方を理解するとともに、自己の記録の伸びや目標とする記録の達成を目指しながら、リズミカルな助走から力強く踏み切って跳ぶことができる。		＜小学校＞ ・自己の能力に適した課題の解決の仕方、競争や記録への挑戦の仕方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができる。	＜小学校＞ ・走り高跳びに積極的に取り組み、約束を守り助け合って運動したり、勝敗を受け入れたり、仲間の考えや取組を認めたり、場や用具の安全に気を配ったりすることができる。

４　単元の構想

（１）児童・生徒について

６年３組の児童は、どの学習においても意欲的に取り組むことができる。特に体育科の学習においては、準備から練習・試合など自分から進んで学習に取り組む姿が見られる。事前に行ったアンケートでは、「体育の授業は好きですか？」という質問に対して、「とても好き」「どちらかといえば好き」と答えた児童が 27 人と、学級の約８割と高い数値を占めている。また、体育の授業が好きな理由に対して、「記録が伸びること」が最も多く、次いで「みんなと協力して活動できること」が多かったことから、競い合って相手に勝つことよりも、自身の体育的技能が向上することやみんなと協力して活動することに、体育の楽しさを見出していることが伺える。
一方で、「走り高跳びの授業が好きですか。」という質問では、「あまり好きではない」「好きではない」と答えた児童が 12 人と、学級の約３割の人数を占めている。その理由としては、「怖くて跳べない」「足を踏み切るタイミングが難しいから」など、走り高跳びに抵抗感をもっている児童も多く、走り高跳びの正しい行い方や自己の課題解決の仕方に課題が残っている。

１年４組の生徒は、活発な生徒が多く、仲間と声をかけ合いながら意欲的に授業に取り組むことができる。事前アンケートでは、「保健体育の授業は好きですか？」の質問に対して約９割の生徒が「非常に好き」「好き」と回答している反面、運動能力は全体的に高くない。「小学生との合同体育の授業は楽しみですか？」という質問に対しては、「とても楽しみ」「楽しみ」と約８割の生徒が肯定的に受け止めている。このことから、他者と協力しながら活動することや助言したり励まし合ったりすることなど、交流することに保健体育の授業の楽しみを見出している生徒も多いのではないかと感じている。「走り高跳びに対してもっているイメージは？」という質問に対しては、「難しい」と回答している生徒も数名いたものの、その理由について、明確な理由がある生徒はいなかった。中学校での授業でインプットした知識や技術を小学生に分かりやすいようにアウトプットすることで自身の知識の深化と技術の向上を図るとともに、他者とのよりよい関わり方についても本授業を通して身につけてほしい。

（２）教材について

「走」「跳」「投」からなる陸上競技における「走り高跳び」は、「助走」「踏み切り」「空中動作」の３つ局面で構成され、その名の通り、助走後の跳躍によって、どの高さまで越えることができるかを競うものである。１回の跳躍にかかる時間が短く、繰り返し挑戦しやすいこと、記録が見た目にも分かりやすいことなどから次の目標が立てやすい。

その一方、リズミカルな助走、バーに対する体の向き、バーを越える際の空中姿勢など、日常生活では行うことのない動作に難しさを感じる運動でもある。また、走力や跳躍力に加え、身長などの身体的な特徴も記録に影響し、結果に個人差が出やすい。

そこで、グループで仲間の試技を観察し、互いに課題を指摘し合ったり、励まし合ったりすることを通して、主体的に活動に取り組ませたい。また、タブレット端末を使用して自分のイメージしている動きと実際に撮影した動きとの違いを比較することで、論理的に考えて体を動かすことにより、自分自身のめざす記録に近づくことを実感できるように授業を展開していく。

（３）指導について

指導にあたっては、記録の向上や競争の楽しさや喜びを味わいながら技能を身につけることができるようにしたい。事前アンケートの結果から、体育の授業全体や走り高跳びの授業に対して大半の児童生徒が前向きに取り組もうとする姿勢がある一方、「記録が向上しない」「運動能力に自信がない」などの理由から消極的な生徒もいる。そのため、グループ学習を通して、仲間同士で技術的な助言や励ましの言葉をかけ合う場面を多く設定することで、心理的不安を取り除くとともに、技術の向上を図ることで前向きに学習課題に取り組める雰囲気づくりに努めたい。また、ICT を活用することで、自身の課題の把握や技術の向上を視覚的に確認し、より具体的に跳び方のイメージがもてるようにする。さらに、個人の目標値を｛（身長×０．５）－（５０ｍ走×１０）｝＋１００で算出し、記録に応じた得点について仲間と讃え合ったり、競い合ったりすることを通して、意欲の向上につなげていきたい。

指導にあたっては次の点に留意する。

〇個人の目標値を｛（身長×０．５）－（５０ｍ走×１０）｝＋１００で算出させ、記録に応じた得点について仲間と讃え合ったり、競い合ったりすることを通して、意欲の向上につなげていく。

【焦点化】

〇ICT 機器を活用することを通して、自身の課題の把握や技術の向上を視覚的に確認することで、より具体的に跳び方のイメージがもてるようにする。【視覚化】

〇グループ学習を通して、仲間同士で技術的な助言や励ましの言葉をかけ合う場面を多く設定することで、心理的不安を取り除くとともに、技術の向上を図ることで前向きに学習課題に取り組める雰囲気づくりに努める。【共有化】

5　単元の評価規準

<table>
<tr><th colspan="2">知識及び技能</th><th rowspan="2">思考力、判断力、表現力等</th><th rowspan="2">主体的に学習に取り組む態度</th></tr>
<tr><th>知識</th><th>技能</th></tr>
<tr><td>＜中学校＞
①陸上競技では、自己の記録に挑戦したり、競走したりする楽しさや喜びを味わえる特性があることについて、言ったり書き出したりしている。
②技術の名称や、動きのポイントに関して、自己や仲間の試技について助言したり書き出したりしている。</td><td>＜中学校＞
①リズミカルな助走から力強い踏み切りに移ることができる。
②跳躍の頂点とバーの位置が合うように、自己に合った踏切位置で踏み切ることができる。
③脚と腕のタイミングを合わせて踏み切り、大きなはさみ動作で跳ぶことができる。</td><td>＜中学校＞
①提示された動きのポイントやつまずきの事例を参考に、仲間の課題や出来映えを伝えることができる。
②提供された練習方法から、自己の課題に応じて、動きの習得に適した練習方法を選ぶことができる。
③練習や競争する場面で、最善を尽くす、勝敗を受け入れるなどのよい取組を見付け、理由を添えて他者に伝えることができる。
④学習した安全上の留意点を、他の学習場面に当てはめ、仲間に伝えることができる。</td><td>＜中学校＞
①陸上競技に積極的に取り組もうとすることができる。
②よい技や演技に称賛の声をかけるなど、仲間の努力を認めようとすることができる。
③用具の準備や片付け、記録などの分担された役割を果たそうとしている。
④一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとすることができる。</td></tr>
<tr><td colspan="2">＜小学校＞
①走り高跳びの行い方を理解することができる。
②５～７歩程度のリズミカルな助走から力強く踏み切って跳ぶことができる。</td><td>＜小学校＞
①自己の能力を適した課題の解決の仕方、記録への挑戦の仕方を工夫しようとしている。
②自己や仲間のよい動きや課題を見付け、考えたことを他者に伝えようとしている。</td><td>＜小学校＞
①走り高跳びの学習に積極的に取り組もうとしている。
②勝敗などを認め、ルールやマナーを守ろうとしている。
③用具の準備や片付け、記録などの分担された役割を果たそうとしている。
④一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとしている。</td></tr>
</table>

6　単元の指導計画

〈小学校〉

次時	学習活動	評価				授業のUD化 ３つの視点
		知	思	主	評価規準	
一 つ か む	①用具の使い方やきまりについて知り、現段階での実力を把握する。			○	・学習の見通しをもち、自分の現段階の実力を把握しようと、走り高跳びを積極的に取り組もうとしている。 （主）－①	焦点化
二 取 り 組 む	②ジグソー学習を通して、「リズミカルな助走」「助走からの強い踏切」「踏切位置」「空中動作（振り上げ足や抜き足の動作）」を確認し、自分の動きの課題について考える。		○		・ジグソー学習を通して、自己や仲間のよい動きや課題を見付け、考えたことを他者に伝えようとしている。 （思）－②	焦点化 共有化
	③自分の課題を把握し、記録会に向けて、目標記録の設定をする。		○	○	・タブレット端末を使って自己や仲間の動きを見比べ、よい動きや課題を把握し、考えたことを他者に伝えようとしている。 （思）－② ・用具の準備や片付け、記録などの分担された役割を果たそうとすることができる。 （主）－③	視覚化 共有化
	④中学生と交流し、自分の課題に応じた練習方法を知り、課題解決に向けて練習に取り組む。 本時	○	○		・中学生との交流を通して、走り高跳びの行い方を理解することができる。 （知）－① ・自己の能力に適した課題の解決の仕方、記録への挑戦の仕方を工夫しようとしている。 （思）－①	視覚化 共有化

三 振 り 返 る	⑤・中学生に教えてもらった練習方法を基に、課題に応じた練習に取り組む。 ・小記録会の中でお互いの取組を相互評価し、次時の記録会に向けて技能の改善について話し合う。		○	○	・自己の能力に適した課題の解決の仕方、記録への挑戦の仕方を工夫しようとしている。 （思）－① ・自己や仲間のよい動きや課題を見付け、考えたことを他者に伝えようとしている。 （思）－② ・一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとすることができる。 （主）－④	視覚化 共有化
	⑥走り高跳びの記録会を行い、学習を振り返る。	○	○	○	・５～７歩程度のリズミカルな助走から力強く踏み切って跳ぶことができる。 （知）－② ・自己や仲間のよい動きや課題を見付け、考えたことを他者に伝えようとしている。 （思）－② ・勝敗などを認め、ルールやマナーを守ろうとしている。 （主）－②	視覚化 共有化

〈中学校〉

次	学習活動	評　価					授業のUD化 ３つの視点
		知	技	思	主	評価規準	
1	①・活動の見通しをもつ。 ・身長と50m走のタイムから目標値を設定する。 ・特性や成り立ち、安全上の留意点を確認する。				○	・学習の見通しをもち、走り高跳びの学習に進んで取り組もうとしている。 （主）－①	焦点化
2 ・ 3	③ジグソー活動で、「リズミカルな助走」、「助走からの強い踏み切り」、「踏み切り位置」、「空中動作（振り上げ足や抜き足の動作）」について理解を深める。	○		○	○	・技術の名称や、それぞれの技術での動きのポイントに関して助言したり書き出したりしている。　（知）－① ・提示された動きのポ	共有化

						イントやつまずきの事例を参考に、仲間の課題や出来映え伝えている。 （思）－① ・一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとしている。 （主）－④	
4 ・ 5	④ドリル練習で合理的な動きを身につける。 ⑤リズムを重視した助走、力強い踏み切りの技術を身につける。 ⑥記録会で記録を確認する。 ⑦タブレットで自他の試技を撮影し、練習の成果や課題を確認する。		○		○	・リズミカルな助走から力強い踏み切りに移ることができる。 （技）－① ・跳躍の頂点とバーの位置が合うように、自己に合った踏切位置で踏み切ることができる。 （技）－② ・学習した安全上の留意点を、他の学習場面に当てはめ、仲間に伝えることができる。 （思）－④ ・用具等の準備や後片付け、記録などの分担した役割を果たそうとしている。　（主）－③	視覚化 共有化
6	⑧小中合同体育を想定した練習を行う。 ・助走練習 ・助走練習（ロイター板） ・X 型に張ったゴム ・通常（バーはゴム）			○		・提示された動きのポイントやつまずきの事例を参考に、仲間の課題や出来映えを伝えようとしている。 （思）－①	共有化
7	⑨課題練習で課題の改善に取り組む。 ⑩タブレットで自他の試技を撮影し、練習の成果や課題を確認する。 ⑪記録会で記録の確認を行う。		○	○		・脚や腕のタイミングを合わせて踏み切り、大きなはさみ動作で跳ぶことができる。 （技）－③ ・提供された練習方法から、自己の課題に応じ	焦点化 視覚化 共有化

						て、動きの習得に適した練習方法を選ぶことができる。 （思）－② ・学習した安全上の留意点を、他の学習場面に当てはめ、仲間に伝えることができる。 （思）－④	
8	⑫課題練習で課題の改善に取り組む。 ⑬タブレットで自他の試技を撮影し、練習の成果や課題を確認する。 ⑭グループ別記録会で互いにアドバイスしたり賞賛したりしながら記録の向上をめざす。			○	○	・練習や競走する場面で、最善を尽くす、勝敗を受け入れるなどのよい取組を見付け、理由を添えて他者に伝えることができる。 （思）－③ ・よい技や演技に称賛の声をかけるなど、仲間の努力を認めようとすることができる。 （主）－②	視覚化 共有化
9	⑮目標記録の達成に向けた記録会を行う。		○		○	・脚や腕のタイミングを合わせて踏み切り、大きなはさみ動作で跳ぶことができる。 （技）－③ ・一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとしている。 （主）－④	視覚化
10	⑯小中合同体育（オンライン）でドリル練習を指導した後、小学生の試技を確認する。	○				・技術の名称や、それぞれの技術で動きのポイントに関することを、自己や仲間の試技について助言したり書き出したりしている。 （知）－②	共有化
11	⑰小中合同体育で小学生の課題の改善に取り組むととも			○	○	・提供された練習方法から、自己の課題に応じ	焦点化 視覚化

	に、中学生は自身の技術と知識の深化を図る。 本時					て、動きの習得に適した練習方法を選ぶことができる。 （思）－② ・一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとしている。 （主）－④	共有化

7　本時（中学校１１/１１時・小学校４／６時）

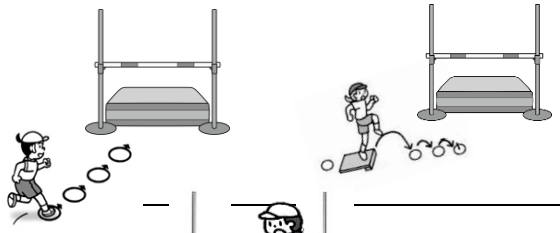
（1）主題

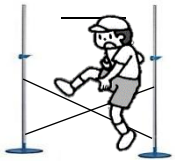
児童：自身の課題を克服し、記録の向上に挑戦することができる。

生徒：小学生への指導を通して、自身の技術の向上と知識の深化を図ることができる。

（2）準備物　　タブレット、走り高跳びセット、セーフティマット、

（3）学習過程

学習活動・内容 ○予想される児童・生徒の反応	○教師の働きかけ 評価（方法）
1　号令、準備運動を行う	○積極的に授業に取り組めるよう、緊張を解せる雰囲気づくりに努める。
2　ドリル練習と本時のめあてを確認する	T1：全体に指示する。 T2：児童生徒の心身の様子を観察する。
3　ドリル練習を行う ・足の振り上げ　　・スラローム走 ・目標タッチ　　・リズム走	○グループに分かれ、中学生がリードしながら練習に取り組むよう指示する。 思提供された練習方法から、自己の課題に応じて、動きの習得に適した練習方法を選ぶことができる。 T1：安全に活動できるよう、全体に目を配る。 T2：配慮を要する児童生徒を中心に観察を行い、必要に応じて助言や補助を行う。
4　課題練習を行う	
目標値に近づくにはどうしたらよいだろう？	
・助走①　　・助走②（ロイター板） ・足の振り上げ（ゴムひも X） ・通常の走り高跳び 	○課題を確認させてから練習に取り組ませることで、より高い意識をもって課題練習に取り組ませる。 【焦点化】 ○中学生には可能な限り、良くなった点や改善点を言語化して児童に伝えるよう声かけを行う。　【共有化】



	ICT 活用 児童が練習する姿をタブレットで撮影することで、課題が確認しやすいようにする。 【視覚化】
○自身の課題について見直したり、新たな課題を見つけたりする。 ○自身の課題は理解できているが、技能として表現できない ○児童に伝えたいことがうまく伝えられない	T1：安全に活動できるよう、全体に目を配る。 T2：児童の様子に目を配りながら、生徒が適切な助言ができるよう、必要に応じて生徒に声かけを行う。 主 一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとすること。
５　振り返りを行う	振り返り ○小学生、中学生それぞれから発表させる。 ○授業終了後、Teams でワークシートを提出するよう指示をする。
６　挨拶・片付けを行う	

〈評価についてのルーブリック〉

思考・判断

A：習得した知識・技能をもとに、体力や技能の程度、性別の違いに配慮して、仲間と共に活動の工夫や修正の仕方を見付けることができている。

B：習得した知識・技能をもとに、仲間と共に活動の工夫や修正の仕方を見付けることができている。

C：習得した知識・技能をもとに、自分の課題を発見することができている。

主体的に学習に取り組む態度

A：体力や技能の程度、性別の違いを考慮した前向きな声かけを行うことができ、それが他者の行動を変容させるレベルである。

B：体力や技能の程度、性別の違いを考慮した前向きな声かけを他者に行うことができる。

C：気づいたことや感じたことを他者に伝えることができる。

8　単元の指導と評価計画

〈小学校〉

単元の目標	知識及び技能	・走り高跳びの楽しさや喜びを味わい、その行い方を理解するとともに、試技の回数やバーの高さの決め方などのルールを決めて競争したり、自己の記録の伸びや目標とする記録の達成を目指したりしながら、リズミカルな助走から力強く踏み切って跳ぶことができるようにする。
	思考力・判断力・表現力等	・自己の能力に適した課題の解決の仕方、競争や記録への挑戦の仕方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。
	学びに向かう力、人間性等	・走り高跳びに積極的に取り組み、約束を守り助け合って運動したり、勝敗を受け入れたり、仲間の考えや取組を認めたり、場や用具の安全に気を配ったりすることができるようにする。

		1	2	3	4	5	6
学習の流れ	0	あいさつ・準備体操・本時のねらいの確認					
	10 20 30 40	○オリエンテーション ・学習の見通しをもつ ・きまりの確認 （人的要因・環境要因） ・現段階での実力把握 （動画で自分の試技を撮影）	○ジグソー学習による走り高跳びの行い方の確認 ・リズミカルな助走 ・助走からの強い踏み切り ・踏切位置 ・空中動作 （振り上げ足や抜き足の動作） ○目標の設定・確認 ○課題把握 ○実技練習 ※第４時までに自身の課題を把握し、動画を中学生に送信しておく。		○小中合同練習会 ・中学生と交流し、課題解決に向けた練習 ・自分にあった練習方法の選択	○ドリル練習 ・足の振り上げ　・リズム走 ・目標タッチ ○課題にあった練習 ・タブレットを活用して自他の動画を撮影し、練習の成果や課題を確認 ○小記録会 ・動画で自分の試技を確認する。	○記録会 ・個人戦 ・グループ戦
	45	振り返り					
評価機会	知				①		②
	思		②	②	①	①②	②
	主	①		③		④	②

単元の評価規準	知識及び技能	①走り高跳びの行い方を理解することができる。 ②５～７歩程度のリズミカルな助走から力強く踏み切って跳ぶことができる。
	思考力・判断力・表現力等	①自己の能力を適した課題の解決の仕方、記録への挑戦の仕方を工夫しようとしている。 ②自己や仲間のよい動きや課題を見付け、考えたことを他者に伝えようとしている。
	学びに向かう力、人間性等	①走り高跳びの学習に積極的に取り組もうとしている。 ②勝敗などを認め、ルールやマナーを守ろうとしている。 ③用具の準備や片付け、記録などの分担された役割を果たそうとしている。 ④一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとしている。

〈中学校〉

単元の目標	知識及び技能	・陸上競技の特性や成り立ち、技術の名称や行い方、その運動に関連して高まる体力などについて理解している。（知識） ・リズミカルな助走から力強く踏み切って大きな動作で跳ぶことができる。（技能）
	思考力、判断力、表現力等	・動きなどの自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己の考えたことを他者に伝えている。
	学びに向かう力、人間性等	・積極的に学習課題に取り組むとともに、勝敗などを認め、ルールやマナーを守ろうとすること、分担した役割を果たそうとすること、一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとすることなどをしたり、健康・安全に気を配ったりしている。

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
学習の流れ	0 10 20 30 40 50	あいさつ、準備体操、体調確認、本時のねらいの確認、基本動作練習										
		オリエンテーション ・学習の見通しをもつ ・特性と成り立ち、高まる体力 ・安全上の留意点（人的要因、環境要因） ※保健分野との関わり	○ジグソー学習 ・リズミカルな助走 ・助走からからの強い踏み切り ・踏み切り位置 ・空中動作（振り上げ足や抜き足の動作） ○ICT の活用場面について検討 ○実技練習		○ドリル練習 ・足の振り上げ ・目標タッチ ・スラローム走 ・リズム助走 ○リズムを重視した助走 ○踏み切り練習 ○タブレットを活用して自他の動画を撮影し、練習の成果や課題を確認 ○小記録会 ・動画で自身の試技を確認する		○小中合同体育を想定した練習 ・リズム助走 ・リズム助走（ロイター居た） ・X 型ゴム	○課題練習 ○タブレットを活用して自他の動画を撮影し、練習の成果や課題を確認 ○小記録会 ・動画で自身の試技を確認する	○グループ別記録会	○練習 ○記録会	○小学生の試技を視聴し、課題と指導方法について検討する。	○ドリル練習 ○課題練習
		振り返り										
評価機会	知		①									
	技				①	②		③				③
	思			①			①	②	②			
	主	①		④	③				②			④

単元の評価規準	知			①自己の記録に挑戦したり、競走したりする楽しさや喜びを味わえる特性があることについて言ったり書き出したりしている。 ②技術の名称や、それぞれの技術で動きのポイントに関することを、自己や仲間の試技について助言したり書き出したりしている。
	技			①リズミカルな助走から力強い踏み切りに移ることができる。 ②跳躍の頂点とバーの位置が合うように、自己に合った踏切位置で踏み切ることができる。 ③脚と腕のタイミングを合わせて踏み切り、大きなはさみ動作で跳ぶことができる。
	思			①提示された動きのポイントやつまずきの事例を参考に、仲間の課題や出来映えを伝えることができる。 ②提供された練習方法から、自己の課題に応じて、動きの取得に適した練習方法を選ぶことができる。 ③練習や競走する場面で、最善を尽くす、勝敗を受け入れるなどのよい取組を見付け、理由を添えて他者に伝えることができる。 ④学習した安全上の留意点を他の学習場面に当てはめ、仲間に伝えることができる。
	主			①陸上競技の学習を積極的に取り組もうとすること。 ②勝敗などを認め、ルールやマナーを守ろうとすることができる。 ③用具等の準備や後片付け、記録などの分担した役割を果たそうとすることができる。 ④一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとすることができる。

５　おわりに

これから子どもたちが生きていく社会は、変化が激しく予測が難しい不透明な社会であると言われています。このことを背景に、子どもたちには未来の社会をたくましく生き抜く資質・能力を育成することが求められています。一方で、変化の激しい社会においては、学校単独で教育活動を遂行しようとしても、これらの課題に迅速かつ的確に対応することに限界があり、小・中学校と地域が連携・協働して、「社会に開かれた教育活動」を実現することが重要視されています。

こうした中、麻里布小学校と麻里布中学校は、令和３年度からの２年間「岩国市小中一貫教育に係る確かな学力研究推進事業」の指定を受け研究を進めてまいりました。現在の教育界が抱える課題を解決していくために正に機を得たものであり、関係者が一丸となって研究テーマの解明に取り組めたことを心から感謝申し上げます。

研究の推進において、１年次は小・中学校が共通のテーマに基づく研究仮説を設定して、ICT 機器の有効的な活用とともに、授業のユニバーサルデザイン化を基盤とした取組を推進しました。また、「学校・地域連携カリキュラム」を開示しつつ、麻里布地区協育ネット協議会の場で、育てたい子ども像を共有しました。このことが研究の重要な起点となったことは言うまでもありません。

２年次は、１年次の取組を生かしながら、３つの部会構成を尊重して、小中学校のつながりを大切にした研究を推進しています。施設分離型の小中一貫教育の推進は、場の設定や時間確保等の困難が伴いますが、だからこそ「学校・地域連携カリキュラム」の検証・改善を念頭に置き、育てたい子ども像を一にした日常的な実践の積み重ねに努め、子どもたちの確かな変容を促すことの大切さを再認識することができました。

本日の発表会では、部会別の授業提供を中心に、これまでの取組を紹介させていただきました。年度末に向けて道半ばではありますが、会員の皆様の忌憚のない御意見・御批正を賜り、今後の取組の糧としてまいる所存です。

結びに、本事業の推進にあたり、御支援・御指導賜りました守山敏晴教育長様をはじめ、市教育委員会の皆様に心から感謝申し上げますとともに、御協力・御参会いただいたすべての皆様の益々の御活躍を祈念申し上げます。

岩国市立麻里布小学校
校長　大　野　元　良